ＥＳＤ・環境教育研究 (Journal of ESD and Environmental Education) **17**:93-126 (2015)
北海道教育大学釧路校ＥＳＤ推進センター

ESD 推進センター主催　大学祭連携企画シンポジウム 2014 報告
命の糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために
―教師を目指す学生を対象とした「酪農家民泊体験実習」の可能性―

教育フィールド研究 8「酪農家民泊体験実習 in 根室」当日の模様

コーディネーター・司会　宮前　耕史（北海道教育大学釧路校准教授）

開会のご挨拶　大森　　享（北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター長）

パネリスト　半澤　礼之（北海道教育大学釧路校准教授）
近江　正隆（(株) ノースプロダクション社長、北海道教育大学釧路校非常勤講師、文部科学省「今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議」委員）
伊藤　美実（北海道教育大学釧路校地域教育開発専攻 2 年生）

アドバイザー　佐々木貴子（北海道教育大学札幌校教授）

閉会のご挨拶　玉井　康之（北海道教育大学副学長（釧路校担当））

大学祭連携企画シンポジウム2014

国立大学法人 北海道教育大学 HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

命の糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために

教師をめざす学生への酪農家民泊体験実習の可能性

パネリスト

近江　正隆　氏（（株）ノースプロダクション社長、北海道教育大学釧路校非常勤講師、文部科学省「今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議」委員）

半澤　礼之　氏（北海道教育大学釧路校准教授）

伊藤　美実　氏（北海道教育大学釧路校地域教育開発専攻２年生）

アドバイザー

佐々木貴子　氏（北海道教育大学札幌校教授）

現在、学校においても様々な食育の取り組みが行なわれています。食育をさらに充実発展させるためには、日々、子どもと向きあう教師自身こそが「食」とこれを産みだす第一次産業・農山漁村の価値を「体験」を通じて身をもって実感し、頭で考え、他者に伝える力を身に付けていることが必要となります。以上の問題関心から、本学では将来教師をめざす学生を対象とした酪農家宅への食育民泊体験実習を軸とした学習プログラムを実施しています。本シンポジウムでは、2年目を迎えた取り組みの成果を報告、今後の課題について検討を加え、教師を目指す学生を対象とした酪農家宅民泊体験実習の可能性を探ります。

2014年10月25日（土）

13:30～15:30　開場30分前　入場無料

北海道教育大学釧路校　講義棟502教室

問い合わせ先：０１５４-４４-３２１４（釧路校総務グループ、担当：宮前）

チラシ

シンポジウム開催にあたり

宮　前　耕　史
（北海道教育大学釧路校准教授）

1．趣旨説明

みなさまこんにちは。本日総合司会を務めさせていただきます、北海道教育大学釧路校の宮前と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開催に先立ちまして、本日のシンポジウムの趣旨やスケジュールを確認させていただきながら、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。

オープニングの動画にもありました。命の糧「食」を生み出す生産現場と子どもたちの日常生活との乖離が問題視されて久しい時間が過ぎています。こうした事態を受け、食育の必要性が叫ばれ、学校においても今日様々な食育の取り組みが行われています。これをさらに充実させていくためには、日々子どもと向き合っている教師自身こそが、食とそれを生み出す第一次産業・農山漁村の価値を体験を通じて身をもって実感し、頭で考え、他者に伝えていく力を身につけている必要があります。このような力量をもつ教師を育成することは、食料生産基地・北海道、とりわけ我が国有数の農業地帯に囲まれた道東に位置する北海道教育大学釧路校の使命でもあります。

以上の問題関心から、釧路校・教育実習委員会では株式会社ノースプロダクション、根室地区農協青年部連絡協議会、JA 北海道中央会根釧支部等のご協力を得まして、本学の学生を対象とした、酪農家宅での1泊2日の作業体験・生活体験を軸とする民泊体験実習を実施しています。本シンポジウムでは2年目を迎えた取り組みの成果を報告し、今後の課題について検討を加え、教員養成過程における酪農家民泊体験実習の可能性を探ってまいりたいと思います。なお手元に資料があると思いますが、こちらは昨年度（2013 年度）の酪農家体験学習の成果をまとめたパンフレットとなっています【別添資料】。

2．パネリスト・アドバイザーの紹介

スケジュールを確認しながら、パネリストの皆様をご登壇順に紹介させていただきます。

北海道教育大学釧路校准教授・半澤礼之氏、心理学が専門です。主催者としてプログラムの概要、構成、スケジュール等についてもご説明させていただきながら、学生が「酪農家民泊体験」を通じて何を学んだか、ご専門の立場からご報告いただきます。また、イメージ映像でも当日の模様についてご紹介させていただきます。

近江正隆氏。株式会社ノースプロダクション社長、北海道教育大学非常勤講師、文部科学省「今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議」委員。また、NPO 法人「食の絆を育む会」理事長として、高校生等、道外の修学旅行生の「民泊体験」の受け入れに取り組まれ、毎年数千人規模での受け入れがあります。本日はその受け入れの真っただ中のお忙しい中で、ご出席いただいております。プログラム実施にあたりましては、大学と地域をつなぐコーディネーターとして奔走いただいた他、講師・ファシリテーターとしてもご協力いただいております。本日のシンポジウム後段のパネルディスカッションでは進行役もお願いしております。よろしくお願いいたします。

伊藤美実さん。北海道教育大学釧路校地域教育開発専攻の2年生です。道東の中標津町のご出身。近江さんの質問（インタビュー）に応えるという形で、参加学生からの感想・生の声をお聞きいただければと思います。よろしくお願いします。

北海道教育大学札幌校教授・佐々木貴子先生。家庭科教育がご専門です。札幌校では総合学習開発専攻、生活・食育グループに所属され、家庭科における食育に関する指導内容や方法、学習教材の研究をされています。半澤先生による成果報告と参加学生からの感想等もふまえ、またご自身が中心となり札幌校で取り組まれている浜頓別での酪農体験塾の取り組みについてもご紹介いただきながら、ご専門の立場から、釧路校の酪農家民泊体験実習に対する評価やご感想、今後の課題等、改善に向けたご助言・コメントをお願いできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

パネルディスカッションの時間にはフロアの皆様と意見交換の時間を設けていますので、ご意見・ご感想や今後の課題等、積極的にご参加していただければと思います。最後に、北海道教育大学副学長（釧路校担当）・玉井康之教授より、本校の最高責任者として、酪農民泊体験実習の課題・可能性や、本シンポジウムへの感想も含め、閉会のご挨拶をさせていただきます。なお休憩時間は設けておりません、2時間続けてご一緒して頂ければと思います。またお手元にアンケート用紙をご用意させていただきました。よろしければご記入していただき、お借りの際に、入口付近の回収箱に入れていただけましたらと存じます。

開会のご挨拶

大森　享
（北海道教育大学釧路校教授・ESD推進センター長）

こんにちは。北海道教育大学釧路校ESD推進センター長の大森です。本日は当センター主催のシンポジウムに参加していただき誠にありがとうございます。最初に、前置きではありませんが、当センターの取り組みついて、若干ご紹介したいと思います。

一つは、ESDの推進を目的としたユネスコスクール。今年度（2014年度）は11月に全国大会、その後、DESDの世界大会が予定されています。私も参加しますが、そのユネスコスクールの道内の登録支援を行っています。

二つ目は、地域に生息する野生動物との共存に向けた野生動物保全教育の普及ということを行っています。先日開催したシンポジウムでは、知床・羅臼町で行われた幼・小・中・高一貫したヒグマと共存するためのヒグマ学習。それから絶滅危惧種で道東に130羽しかいないしまふくろう。それを守るための虹別中学校の取り組み。これは虹別コロカムイの会と共同しています。そういった事例を元に、子どもが野生動物と共存できるような、そういう学力・知識・態度が、子どもの発達においていかに重要なのかということをやっています。また、キタキツネ。エキノコックスで大分問題になりましたが、キタキツネといかに共存するか、エキノコックスとは何なのか、どのように対処するのか、感染リスクを下げるための駆虫剤の散布等の研修会を行っています。

三つ目は、エネルギー問題とまちおこし。まちおこしをテーマにエネルギー問題に取り組んでいます。「再生エネルギーを釧路の町から」ということで、日本とドイツの比較研究をして、どこに日本の課題があるのかということを、シンポジウムを開催して考えてきました。

長々と前置きをしました。さて、本シンポジウムでは、とかくブラックボックス化される食糧生産過程における深い命の触れ合いの体験に焦点を当て、そのようなことがどのような教育的価値を持っているのかということを、みなさんと共有したいと考えています。酪農体験、民泊体験。それを、学習者として参加した大学生の学びの言説をもとに、そのような教育的価値を抽出していく。これは僕の考えですが、おそらくみなさんとも共有できると思います。

日本の子どもたちの負の現状の中で、いじめや自殺といった問題があります。確か昨年のことだったと思いますが、小学校3年生の女の子が自殺するという、ものすごい事態がありました。そのような命の軽視の現状の中で、ペットではない、食糧生産過程の中で、命の「深い体験」をする。そういった取り組みを広げていくということは、そうした命の軽視の克服に向けた大きな教育の一歩になるだろうと考えています。

最後にESDの話をします。高度に発達した21世紀の日本の資本主義国家の中で、様々な教育の課題があります。それをラディカルに、根源的に克服していくような取り組みを行っていくに当たり、ESDのもつ教育的価値、視点、内容、これらは歴史的な問題を転換する重要な視点になると思います。私はそのようにESDを捉え、一生懸命普及に取り組んでいます。

最後になりました。本シンポジウムでパネラーをお務めいただく先生方、遠方よりお越しいただきありがとうございます。企画・準備・運営を中心になりすすめていただいている宮前先生、ありがとうございます。それから大森研究室の伊藤美実さん、がんばってください。

以上、ご挨拶にかえさせていただきます。

プログラムの概要と成果報告

半　澤　礼　之
（北海道教育大学准教授）

はじめに

ご紹介いただきました。半澤です。本プログラムの概要と成果についてお話しさせていただきます。お手元の資料と画面は基本的に同一のものとなりますので、どちらか都合の良い方をご覧になっていただければと思います。

本報告の流れです。まず民泊プログラムの概要についてお話しさせていただきます。話しだけだとイメージがわきにくいかと思いますので、近江さんに当日の写真を使ったムービーを作っていただきました。それをご覧になっていただきたいと思います。

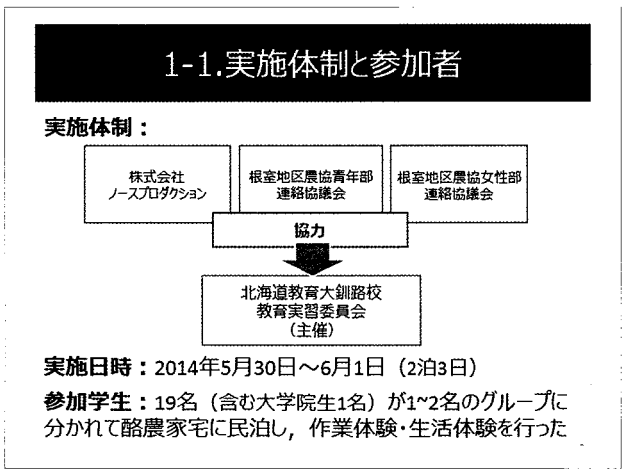
それから成果報告として、学生は民泊体験を通じて何を学んだのかという点について、アンケートをしたり、学生の学習を測定するコンセプトマップを使いましたので、それらをご覧になっていただきながら、お話しをいたします。また、学生が何を学んだのか、インタビューも行なっています。こちらの動画もご覧になっていただきたいと思います。

補足として「今後の課題」というものがあります。こちら後ほどパネルディスカッションで触れることができればと考えております。

1．民泊プログラムの概要

1－1．実施体制と参加者

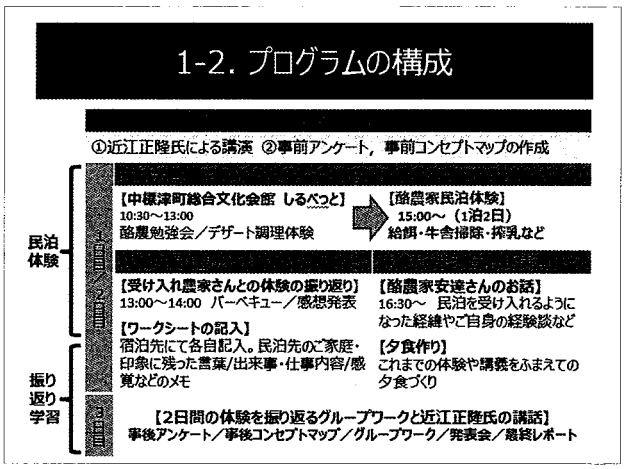
民泊プログラムの概要についてお話しをさせていただきます（【図 1-1】）。まず実施体制と参加者ですが、実施体制は株式会社ノースプロダクションや根室地区の農協青年部・女性部の皆様、JA 北海道中央会根釧支部の皆様のご協力を得て、北海道教育大学釧路校実習委員会が主催ということになっております。期間は 5 月 30 日～6 月 1 日までの 2 泊 3 日。参加学生 19 名、活動の際は 1 ～ 2 名のグループに別れ、酪農家さんのお宅に民泊、作業体験や生活体験を行ったというのが大枠です。



【図 1-1】プログラム実施体制と参加者

1－2．プログラムの構成

実際にどのように行われたか申しますと、それがこちらのプログラムの構成となっております（【図 1-2-1】）。最初に事前研修会というものを行いました。こちらは近江さんによるご講演と、「事前アンケート」の実施と「事前コンセプトマップ」の作成ということを行っております。



【図 1-2-1】プログラムの構成

その上で、2 泊 3 日の実習が行われました。1 日目から 2 日目にかけてが、体験学習と体験の振り返りということになっています。

体験学習の初日、1 日目は最初に酪農勉強会ということを行いました。青年部の皆様にご協力をいただいて、酪農とは何かということをご説明をいただきました。それからデザート調理体験ということで、実際にそこで作

られている材料を使って、デザートを作るということを行いました。これは女性部の皆様に御協力いただきました。その後、先程も申し上げた通り、バラバラに分かれて酪農家さんのお宅での民泊体験を行いました。

お世話になった酪農家さんのお宅により多少仕事内容は異なりますが、餌をあげたり、牛舎の清掃をしたり、搾乳などを実際に行ったりといった作業体験を行ったということです。私自身も宿泊こそしませんでしたが、酪農家さんのお宅で牛舎の掃除などを体験させていただきました。

2日目は戻って来まして、受け入れていただいた酪農家さんとの体験の振り返りということでBBQをしました。酪農家さんのお宅で牛のお世話をさせていただいた後に牛を食べると。ここでは感想発表会も行いました。

その後、場所を移して酪農家の安達永補さんのお話しをうかがいました。安達さんが民泊を受け入れるようになった経緯やご自身の経験談等、お話ししていただきました。そういったことも踏まえて、地元のものを主に使って、夕食作りを行います。体験しっぱなしということでは学習になりませんので、空いた時間で、振り返りをするという意味でワークシートの記入をしてもらいました。民泊先のご家庭について、民泊先でうかがった印象に残った言葉、作業・出来事・仕事内容等をメモにとってもらっています。

ここから2日～3日目にかけてが振り返りの学習ということになります。1日目から2日目にかけての2日間の体験を振り返りつつ、グループワークを行ったり、近江さんから講話をいただいたりしました。事後アンケートや事後コンセプトマップ、グループワーク、発表会、最終レポート等々、様々な形で学生さんにはワークをしていただきました。少し見にくいですが、3日目のプログラムは、朝7：30に起きて、帰りまではこのようなスケジュールになっております（【図1-2-2】）。

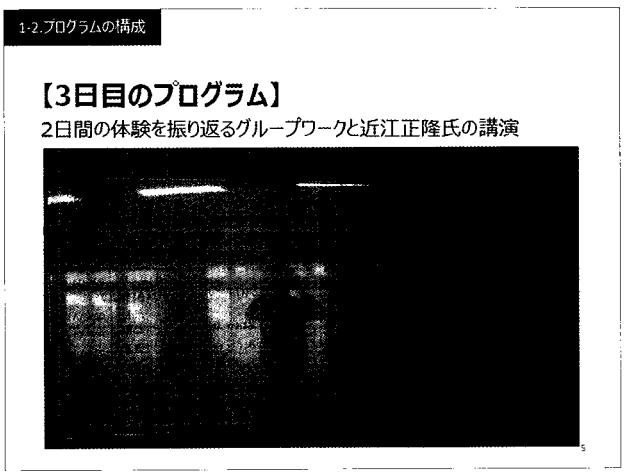
1－3．学生が取り組んだワーク

体験については後ほどムービーでもご紹介いたしますので、まず、振り返りの際、学生が具体的にどのようなワークに取り組んだのか、ご紹介したいと思います。

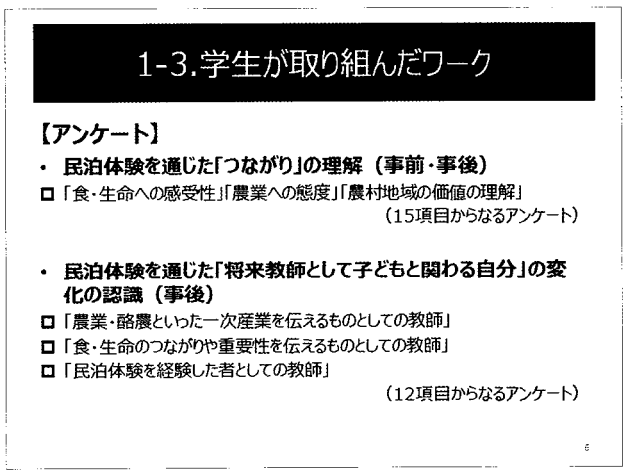
まずアンケートについてですが、2つ行っています（【図1-3-1】）。一つ目は、「民泊体験を通じたつながりの理解」というテーマのアンケートです。大枠では食・生命への感受性、農業への態度、農村地域の価値の理解、これらを問うような15項目のアンケートを、民泊に行く前と後で行っています。事前と事後とで、これらに対する意識がどう変わったのかを問うために、このようなアンケートをさせていただきました。

2つ目は民泊体験を通じた「将来教師として子どもと関わる自分」の変化の認識というテーマでアンケートを行なっています。大きな項目として、「農業・酪農といった一次産業を伝えるものとしての教師」、「食・生命のつながりや重要性を伝えるものとしての教師」、「民泊体験を経験したものとしての教師」等、12項目のアンケートをとりました。これは事後のみです。

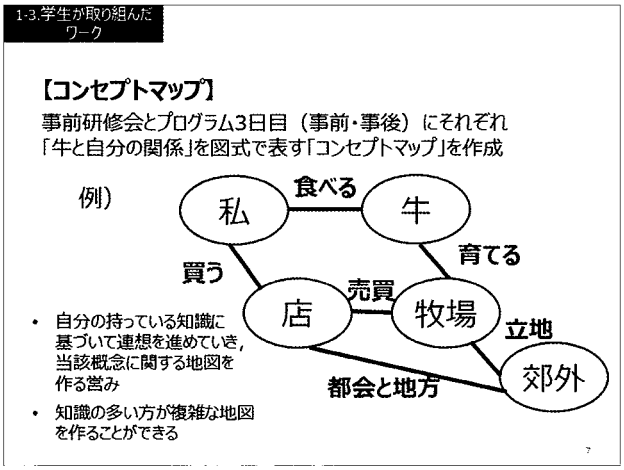
そしてもうひとつ、先程から出てきています、コンセプトマップという聞きなれないものですが、学生の学習、知識や知識構造の変化を測定する道具を使っています（【図1-3-2】）。これは事前研修会と、プログラム3日目、つまり民泊に行く前と後とにそれぞれ牛と自分の関係を



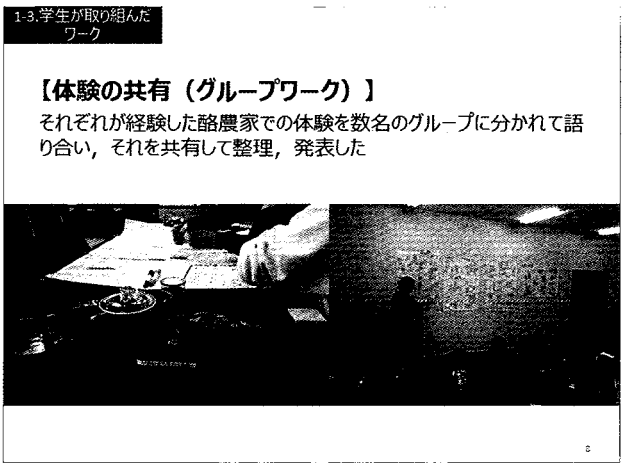
【図1-2-2】3日目のプログラム



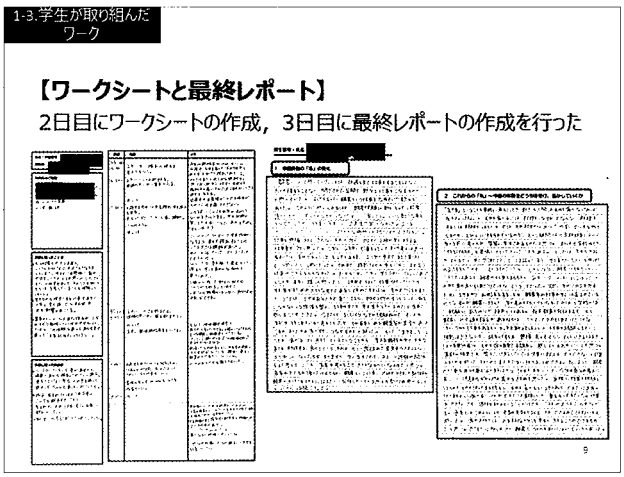
【図1-3-1】学生が取り組んだワーク



【図 1-3-2】コンセプトマップ



【図 1-3-3】体験の共有（グループワーク）



【図 1-3-4】ワークシートと最終レポート

図式で表現するマップを作ってもらっています。

具体的に説明いたしますと、白紙の上に「私」と「牛」と書いてもらうんですね。書いてもらった後に、そこにどういうつながりがあるのかということを連想していただいて書いてもらう作業です。たとえば、まず私は牛を食べるというつながりがあります。でも、私は牛を直接手に入れることはできない。お店を経由して買うんだという連想が出てきます。でも、店が直接牛を飼っているわけではなく、牧場で飼っているわけですし。また、牧場はたいてい郊外にあって、店は市街にあるわけですから、ここには例えば都会と地方の関係がある。といったように、最初は私と牛というキーワードしか書かれていないものについて、自分が持っている知識を使ってどういうものが連想できるかということを考えていく。

【図 1-3-2】の左下にもありますが、自分のもっている知識に基づいて連想を進めていき、当該概念、今回の場合は「私と牛」とのつながりについて考えていくのがコンセプトマップです。知識の多い方が複雑なマップをつくることができます。知識が無ければ連想はできませんので。これを、行く前と行った後に作成してもらっています。

また体験の共有ということでグループワークを行い、それぞれが経験した酪農家での体験を数名のグループに分かれて語り合い、それを共有し整理、発表をしてもらっています（【図 1-3-3】）。他の酪農家ではどのようなことが行われていたのかということも含めて、意見・考えを共有していきました。

そして最後、ワークシートと最終レポートということで、2 日目には先ほどのワークシートの作成、3 日目には「受講前後の『私』の変化」、それと「これからの『私』」というテーマでレポートを書いていただきました（【図 1-3-4】）。実際に酪農体験に行き、講義や振り返りを通じて学びを深めるという作業を、学生にはやってもらったわけです。

私の話だけですとイメージしにくいかもしれません。実際の当日の様子をムービーで作ってもらっていますので、こちらをご覧いただきたいと思います。

（ムービー省略）

2．成果報告―学生は民泊体験で何を学んだのか

2－1．アンケート結果からみる学生の学び

ということで、2泊3日実習の模様をムービーでご紹介させていただきました。次に成果報告ということで、民泊体験を通じて学生は何を学んだのかということをお話しさせていただきます。

先ほどもお話しいたしましたように、学生が取り組んだワークは5つあるわけですが、ここでお話しさせていただくのは次の2つ、アンケートとコンセプトマップについてです。アンケートというのは先ほどもお話しした通り、受講前後における農業やその価値を教師として子どもたちに伝えていくことに対する認識の変化について。行く前と行った後で、そうした教師としての役割に対する認識がどう変わったのかということ。コンセプトマップでは、受講したことによって、農業・第一次産業に対する知識や知識構造がどのように変化したかを測定するものになっています。

2－1－（1）民泊体験を通じた「つながり」の理解

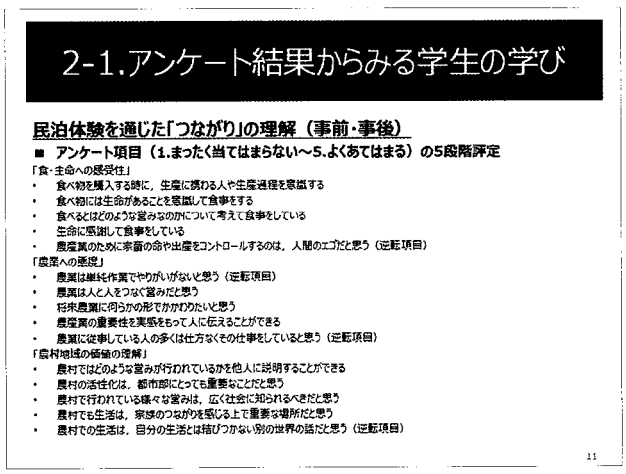
具体的な結果についてお話しします。先ほど、アンケートは2種類のものを行ったとお話ししました。まず最初に2種類のアンケートについて、1つ目、「民泊体験を通したつながりの理解」に関するアンケートです。項目はご覧の通りです（【図2-1-1】）。行く前と行った後とで、同じアンケートに答えてもらっています。ここにある項目に対して、自分の気持ちが「まったく当てはまらない」の1から「よく当てはまる」の5までの5段階評定をしてもらいました。基本的には平均値が5に近ければ近いほど、こういったことが理解できているということを表すためのアンケートです。

そうするとどうなったのか（【図2-1-2】）。15項目ありますが、大枠としては3つのことを聞いています（①「食・生命への感受性」、②「農業への理解」、③「農村地域の価値の理解」）。ここでは大枠の結果だけご報告しますが、①「食・生命への感受性」が受講前平均値が3.25であったのが、受講後の平均値は4.23と上がっております。先程もお話ししたように5に近ければ近いほど理解が深いということを表しますので、行った後の方が理解が深まっているということになります。

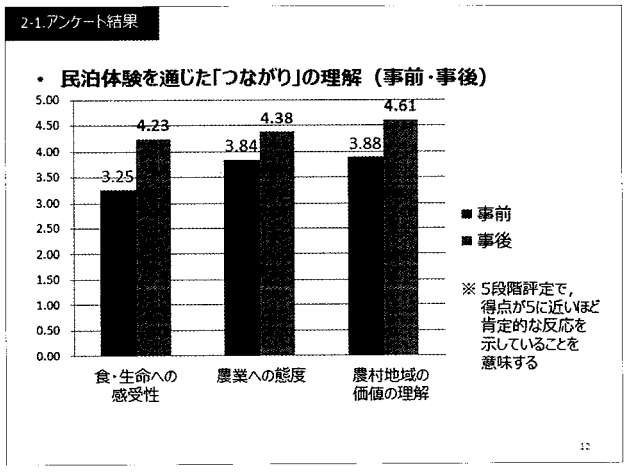
あとの2つについても、細かな数値は申し上げませんが、受講後の平均値が上がっている。理解が深まっていると言うことができます。

2－1－（2）民泊体験を通じた「将来教師として子どもと関わる自分」に対する変化の認識

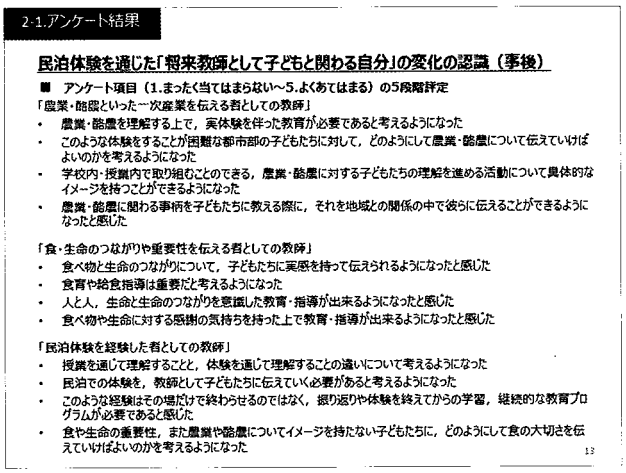
2つ目のアンケートは、「民泊体験を通じた将来教師として子どもと関わる自分の変化の認識」に関するものです（【図2-1-3】）。これは民泊体験に行った後に聞きまして、同じく5段階で評定してもらっています。これも5に近ければ近いほど、そうした教師としての意識が高いということを表します。こちらもお示ししている通り、どれも5に近い値を示しておりますので、学生は将来教師として子どもと関わる自分について、横軸に示しました項目について（①「農業・酪農といった第一産業の価値を伝える者としての教師」、②「食・生命のつながりや重要



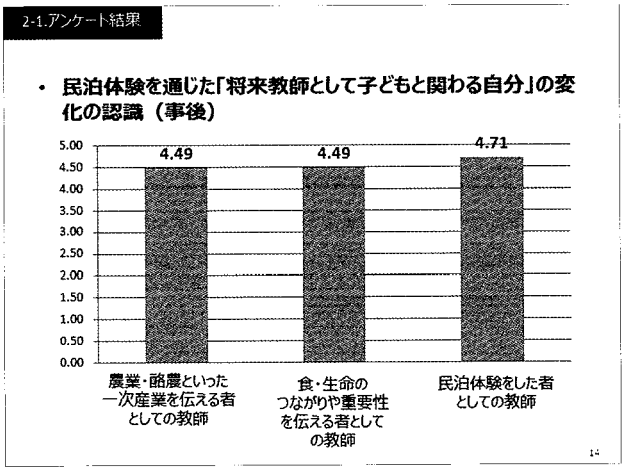
【図2-1-1】民泊体験を通じた「つながり」の理解に関するアンケート



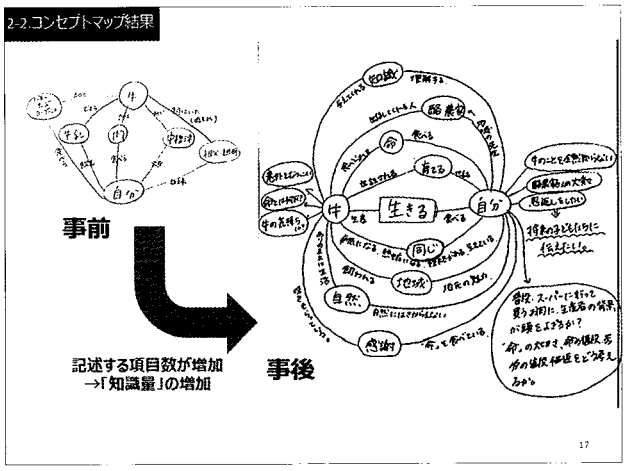
【図2-1-2】民泊体験を通じた「つながり」の理解に関するアンケート結果



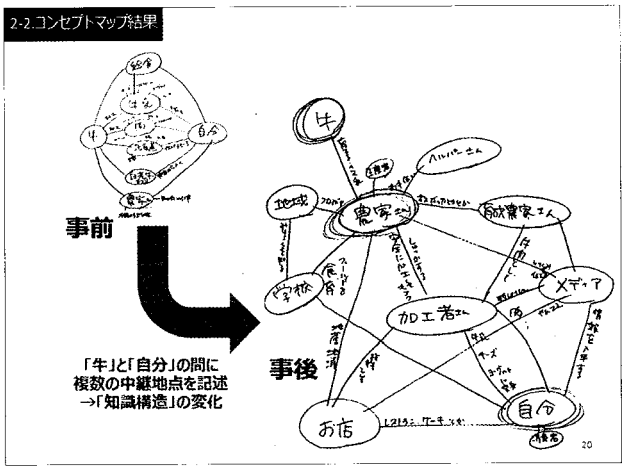
【図 2-1-3】民泊体験を通じた将来教師として子どもと関わる自分の変化の認識に関するアンケート



【図 2-1-4】民泊体験を通じた将来教師として子どもと関わる自分の変化の認識に関するアンケート結果



【図 2-2-1】コンセプトマップ Case1：A さんの場合



【図 2-2-2】コンセプトマップ Case2：B さんの場合

性を伝える者としての教師」、③「民泊体験をした者としての教師」)、そう意識を強く持っていくということが分かってきます（【図 2-1-4】)。つまり、アンケート結果からは、食や第一次産業の理解が深まり、それを伝える者としての教師という意識が高まっているということが分かります。

2－2．コンセプトマップからみる学生の学び

2 つ目、コンセプトマップからみる学生の学びということでお話しいたします。ケース（事例）を 2 つお示しします。先ほども申し上げました通り、私と牛とのつながりに対する理解の変化について問うています。

【Case1：A さん】の場合を例に見ると（【図 2-2-1】)、事前よりも事後の方が、たくさんのことが書けるようになっているということが分かります。記述する項目が増えているということは、自分と牛とのつながりに関する知識量が、それだけ増えているということになります。

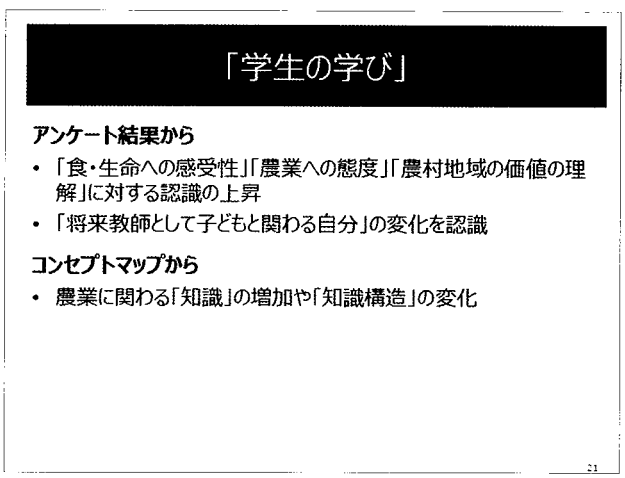
もう一人、【Case2：B さん】の例を出しますと（【図 2-2-2】)、項目数自体はそれほど変わってはいないのかもしれませんが、よく見ていただくと、行く前には、自分と牛の間に、肉とか牛乳とか、一つの項目しか設定されていません。でも、行った後のものを見ると、牛と自分の間に複数の中継地点を記述しています。つまり、牛と自分との間にはたくさんの人が関わっているんだと、絡んでいるんだということを表しているんですね。知識構造の変化ということになりますが、牛と自分というのは、ただ食べる－食べられるという関係だけではなくて、その間にたくさんの人たちが介在しているのだという知識

が深まっていると言うことができます。

Aさんの場合には知識量がグンと上がってたくさんの項目が書けるようになりましたし、Bさんの場合は自分と牛との間に複数の関係を想定するようになっている。いろんな、たくさんの人が介在していることを想定している。「つながり」を理解できるようになっている。いずれも学びが深まっているということがコンセプトマップの結果からは言うことができます。

3．小括―学生の学び

というわけで、これまでお話させていただいてきたことをまとめますと、アンケート結果からは、「食・生命への感受性」、「農業への態度」、「農村地域の価値の理解」に対する認識の上昇、「将来教師として子どもと関わる自分」の変化を認識することができたということができます（【図3】）。



【図3】学生の学び

また、コンセプトマップからは、農業に関わる知識の増加や、知識構造の変化が見られるということで、単に「体験に行った」「面白かった」「楽しかった」というだけではなく、このような数値やコンセプトマップのデータから、学生はこの民泊体験を通じて、深い学びをしていたのではないかということができるのではないかと考えます。加えて、当日にはインタビューもとっておりますので、学生の声もお聞きしていただきたいと思います。

【参加学生インタビュー①】伊藤美実さん（2年生、中標津町出身）

(Q1) この実習を受けられた動機をお聞かせください。

(伊藤) 地元ということもあり、将来役に立つ知識とか、地域に密着してみるっていう…。学校外に出ることがあまりないので、実際にやってみたいと思って、参加させていただきました。

(Q2) 地元・中標津町のご出身ですが、このような体験をされたことはありましたか？

(伊藤) 実際にということはなかったですね。農業試験場に行かせていただいたことはあったんですけど。牛を間近でみたりするということはなかったですね。

(Q3) 体験された感想を聞かせてください。

(伊藤) もちろん、ミルクをあげたりするというのはとても楽しいんですけど、搾乳とか、大変な部分がたくさん見えて。牛に蹴られたりとか。餌押しとかはちょっとしかやってないのに、重たくて腰が痛くなったりして、大変だなっていう一面も見れてすごく勉強になりました。

酪農はすごく大変で、お年寄りがやるというイメージをもっていたんですけれども、すごい若い方が多くて。地域を担う人たちは、やっぱり若い人たちなんだなっていうことをすごく感じました。

想像していたこととぜんぜん違って、今まで牛は遠い存在と思っていたんですけど、人間と同じように病気にもなるし、すごく身近というか。食とか、食べ物とか、お肉とか牛乳というのは、近いというか。近いけど食べていて。矛盾していますが、不思議な感じがしました。ありがとうという気持ちで食べることができました。

【参加学生インタビュー②】渡部南さん（4年生、愛知県出身）

(Q1) どうして、北海道教育大学に進学されようと思ったのですか？

(渡部) 家も農家で、自分も農家になるんだとかいろいろ考えたときに、自然体験とか農業とかを伝えられる人間になりたいと考えたときに、それを伝えるのは農家ではなくて先生なのかなと。

(Q2) ご実家は農家さんなんですね！

(渡部) 主に野菜を。他に鶏とか山羊とかも飼っていて。自分の家も子どもの（作業体験の）受け入れとかしていて。民泊体験みたいなものも年に4回位受け入れていて。コースを分けて。愛知県の子どもたちが来ることが多いのですが、中には東京の子どもたちも受け入れることもあっ

たりして。農業をしながら野菜も出荷しています。

(Q3) わりと日常に、そのようなことがあったんですね!!

(渡部) そうですね、小さい頃からそういうことが当たり前で、そのような環境で育ってきたんですけど。でも、小さい時はそんな環境が大嫌いでした。

(Q4) この実習を受けられた動機をお聞かせください。

(渡部) 以前、研究室の活動で民泊体験を浜中町でしたんですね。その時に、農家さんの温かさとか、家族で経営して、暮らしと仕事が一体化している酪農。そんな暮らしがすごく素敵だなと思って。もう一回、そんな人たちと関わりたいと思って参加しました。

(Q5) 体験された感想を聞かせてください。

(渡部) やっぱりとても温かくて。最初はすごく緊張したんですけど。仕事とかも教えてもらったんですけど、全然できなくて。でも、ありがとうとか言ってくれるのも、とても嬉しかったですし。ご家族も、奥さんがいて、お子さんも3人いて、おじいちゃん、おばあちゃんもいて。家族でつながっているという感じが私も実感できて。やっぱりいいなって思いました。

(Q6) この体験を今後どう活かしていきたいですか？

(渡部) 先生になったら子どもたちに民泊体験をさせたいってずっと思ってたんですけど、2回目をやって、1回目は感動ばかりで。2回目は、1回そういう感動を受けてからの2回目だったので、じゃあ、これをどのように伝えればいいんだろうということを考えて、自分自身。ただ体験させて、自分たちは牛乳を飲むけど、それまでにはこんな過程があるんだよっていうことだけでいいのかなというのをすごく疑問に思って。

何か、たとえば牛のウンチとか掃除して、飼っている牛を食べるとか、そういう経験をしたことのない子にとっては、何で飼ってる牛を食べるのとか、ウンチを見て汚いとか、普段の生活では考えられないようなことを、酪農家さんの生活では当たり前にしていて。ただ牛乳を作る過程はこうだよって教えるよりも、生きている原点みたいな。本当はそういうことが当たり前なんだよっていうのを伝えたいなっていうのを、改めて今回感じました。

以上、プログラムの概要と成果報告ということでご報告させていただきました。どうもありがとうございました。

学生から見た「酪農家民泊体験」

近　江　正　隆
（株式会社ノースプロダクション社長）
伊　藤　美　実
（北海道教育大学釧路校２年生）

近江氏の質問に応える伊藤美実さん

（近江）

株式会社ノースプロダクションの近江と申します、よろしくお願いいたします。10分ほどということで、私の話よりも、実際に体験された伊藤さんにお話をいただきたいと思います。ちなみに先ほどのインタビューのお一人目が伊藤さんだったと思います。私も「教育フィールド研究８」で根室管内の酪農家さんの家で１泊２日のホームステイをして、振り返りながら考えるということを２年連続で関わらせていただきました。

今年、１日目は中標津の会館で料理教室であったり、青年部の人のお話しを聞いたりしたんですが、伊藤さん、中標津のご出身ということで。おそらく昨年も、道東出身という方はいらっしゃらなかったんですよね。ですから、なぜ、ご自分が生まれた地域がフィールドになっている実習に参加されたのかということ、素朴な疑問なんですが、まずはじめにお聞きしたいと思います。

（伊藤）

民泊に参加した理由はたくさんあって、私自身、地域を回る機会がなくて。近江さんの入学式でのお話を聞いて、もともと参加したいという気持ちがありました。

地元・中標津という点では、小学生のころから地域の方と触れ合う時間がたくさんありまして、たぶん通常の学校と比べるとそういうことも多かったと思います。地域と学校が連携を取れるということは教育において大切なことではないかという考えが私にあって、そういう環境を整えたいと思って。で、そういう環境を整えるためにはどうすればいいんだろうって考えた時に「教育フィールド研究８」があったので、参加したいなって思いました。

（近江）

今「入学式で」というお話がありましたが、ちょうど伊藤さんたちが入学した時に、私を呼んでいただいて、みなさんの前で、新入生の前でお話しさせていただく機会がありました。それがきっかけの一つだったというのが嬉しいなというか、ありがたいのですが（笑）。

「教育フィールド研究８」に参加する動機は分かったのですが、なぜ先生になろうと思い、またこの大学に進学しようと決めたんですか？

（伊藤）

教員になることを考えた時に、色々な理由があって先生になろうと思ったんですけれども、理由のひとつとして、先程もお話したように、地域の方々と触れ合うことが小学校の時から多かったということもあって。小学生の時にも実際に農家の方が学校に来てくれたこともありましたし、１年間を通して、農業をやってみようという授業でじゃがいもを作ったりしたことがあって、そのような活動も、私が教師になった時にできたらいいなと思いもあって、先生になりたいと思いました。

（近江）

最後にうかがってみたいと思っていたこともお話ししていただきましたが、実際にどんな先生になりたいとか、ありますか？

（伊藤）

どのような先生になりたいかといいますと、この大学に来てからどんどん変わっていってもいるんですけれども、今回「教育フィールド研究８」を受講してみて、このような先生になりたいなって見えたビジョンとしては、酪農家の安達さんのお話の中にもあったんですけれど、今の子どもは食事をする時に、命をいただくという感覚がないという、食事が作業化してしまっているという話がありました。子どもの中には魚は切り身で泳いでいる

とか、牛乳は工場から来ているとか、考える子どもたちが大勢いるという話があって。教員になったときに、そのような体験の場を設けてあげることのできる教師になりたいと今回すごく感じました。

（近江）

そういう意味では、今回体験されたことは非常によかったんですかね？実際にそのあたり、感想ということで、先ほどの映像にもありましたが、どうですか？

（伊藤）

やはり、子どもに伝える前に自分自身が体験してみるというのは、とても大切じゃないかと思っています。今回体験して一番驚いたことは、地元なのに全然知らないことばかりで、それが自分にとってショッキングで。やはり毎日見てる光景だから私は自分では知っている気がしていたというか、そういう先入観があったんですけど、深くまで見ていくと、そこに農家さんの思いがあったり、知らなかったら見えてこなかったものというのもあったんですが、やっぱり体験してみた人しか分からない気持ちとか、感情とか。そういうものを見つけることができたと思いました。

（近江）

体験したからこそ分かったというのは、とても胸に響きました。ありがとうございます。先ほど、冒頭、大森センター長のお話にもありましたが、私もこの2年間関わらせていただく中で、まさしくブラックボックス化してしまっている食の生産過程における命とか、それが本当に大事だということがなかなか伝わり切れていないと。それを言葉で伝えることはできるのかもしれませんが、それが本当に「伝わる」という形で、自発的・内発的に価値観に落とし込み、感じてもらうためには、やはり体験からでしか伝わらないのかなと思います。ただ、体験だけだと、先ほど半澤先生のお話にもありましたが、体験しただけでは深い学びにならないということで、振り返りだったり、学びを深めるといった形で、2年間関わらせていただいたのですが、伊藤さんの話を聞いてやはり大事なんだなと思いました。

もう一方では、伊藤さんの最初のお話しにもありました。「地域とのつながり」ということを考えた時に、民泊体験というのはやはり意義があるのかなということを、伊藤さんの存在、伊藤さんに言っていただいた参加動機ということから感じました。もしかしたら、食とか命とか、一緒に考える入口だったとすれば、宮前先生もおっしゃっている地域に根ざした教育、そういう本質的な、先生が地域と向き合っていくための入口としての民泊。民泊では寝食をともにするわけですから。こういったアプローチが、食・命という問題だけではなく、民泊というものが、先生が地域に根ざすための入口にもなり得るということを、伊藤さんから学ばせていただいたというように思います。

後ほどパネルディスカッションで私と伊藤さん、二人とも登壇させていただきますが、先ほど体験してよかったよという声をいただきました。今、この場に今年と去年で「教育フィールド研究8」に参加した方はどれくらいいらっしゃいますか？…7名ですか。ほとんどの学生が参加されてない中で、何か、参加された側としてメッセージがあればお願いします。同じ学生さんに向けて一言。

（伊藤）

今回「教育フィールド研究8」から学んだことはたくさんあったんですけれども、やはり人とのつながり、地域のつながり、食に関しても、生命、いろんなことを考えるきっかけになる授業だったと思います。私は道東から参加させていただきましたが、地域に関係なく参加できるものじゃないかなと思います。なので、道外の方、道内の方、もちろん道東の方も、それぞれ学ぶことがたくさんあるんじゃないかなと思います。たくさんの発見ができる「教育フィールド研究8」なので、ぜひ参加してみてください。

（近江）

お時間になりましたので終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

命の糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために
—酪農体験塾 in 浜頓別—

佐々木　貴　子
（北海道教育大学札幌校教授）

はじめに

みなさま、あらためまして、こんにちは。今、宮前先生から、釧路校の酪農民泊体験実習に関する評価やご感想、今後の課題と改善に向けたご助言、コメントをいただきたいということでご紹介いただきましたが、ここで私がコメントを申し述べるようなことはございません。私が今、札幌校で行っている「酪農体験塾 in 浜頓別」をご紹介しながら、みなさんに、私のコメントについて考えていただけたらと思います。

1．家庭科教育と ESD

実は私は 1978 年に釧路校の中学校課程の家庭科を卒業しています。ですから、私はここにいらっしゃる学生さんたちの先輩になると思います。その中で、私が今まで体験して、生きてきたことを踏まえて、みなさんにメッセージを送れたらなという思いで今日はまいりました（【図 1-1】）。

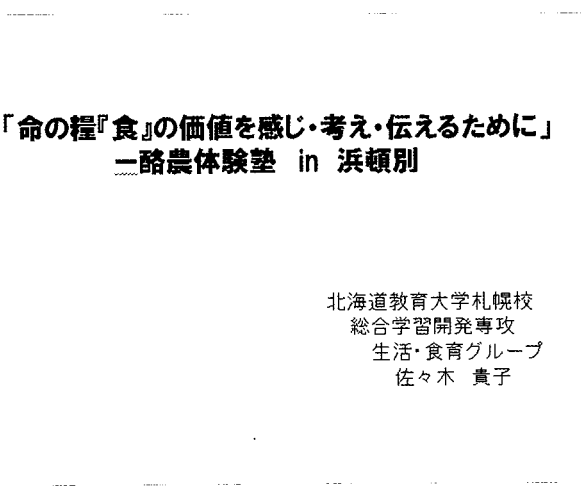
私は今申しましたように、1978 年にこの釧路校を卒業して、東京にある女子栄養大学でいわしの研究をしていました。その時に、私立の高校から非常勤講師のお願いを受けまして、中学校と高等学校で教員をしました。その後、いわしは喋ってくれないけれども中学生や高校生は喋ってくれる、教師という仕事はなんて楽しいんだろうというふうに思い直しました。

私は小学校の免許ももっていましたので、小学校・中学校・高等学校を体験した後、どの校種の教員になろうか決めようと思い、その後一年間、小学校でも教師をやりました。最終的には中学校の教員になりたいと思い、千葉県の採用試験を受けて、流山というところで 14 年間、仕事をしました。

今日、このシンポジウムが ESD 推進センターの主催ということを聞き、とても嬉しくなって、いさんでまいりました。なぜ ESD という言葉に私は嬉しく思ったのかといいますと、今週の月曜日に小学校家庭科教育法という授業が札幌でありました。その時に、学生たちに「持続。可能な開発のための教育」、ESD という言葉を知っているかとたずねました。そうしたら、40 数人のなかで数人だけ、言葉を聞いたことがあると言いましたが、中身は知りませんでした。私はこのことをとても悲しく思ったんですね。何でこの言葉を知らないのと思いました。

私が大学を卒業して 10 年くらい経った時、1987 年にノルウェーの首相が提唱した、環境と開発に関する世界委員会でこの持続可能な開発の概念が取り上げられました。この頃から世界的に環境問題が取り上げることになり、1990 年代になると、東京では環境団体が主催する環境教育の講習会が開催されるようになりました。当時私は中学校の家庭科教員をしておりましたが、環境問題というのは、家庭科つまり暮らしに関わる家庭科が今後最も重要とする問題であると考え、個人的に研修会に参加し、勉強を続けてまいりました。

私が中学校の教員を辞める 1995 年—ちょうど阪神淡路大震災があった年までの数年間、私は、食教育、今でこそ食育と呼ばれますが、食教育と環境の関わりを意識して、中学生に、理科、社会、家庭科、保健体育などの教科をつなげながら、食の重要性に関する教育をしてまいりました。



【図 1-1】酪農体験塾 in 浜頓別

阪神淡路大震災が1995年1月に起こり、来年で20周年になるわけですね。防災ということも、視点に入れました。なぜ防災だったのかと言いますと、私は先程言いましたように釧路で生まれ育っていますので、小さい時から命の教育、自分の命は自分で守るしかない、いかに自分の命を守っていくかという教育を親から受けてきました。ですので、防災も食も自分の命を守っていく、つないでいく、そういう教育であることから、家庭科教育に取り入れるべきであるということで、この研究に取り組んでまいりました。

家庭科は他者の命に与える影響に配慮した暮らし方、生き方を考える教科であるというふうに私は考えています。したがって、ESDは非常につながりがあるものだと私は思っています。

私が大事にしている言葉は、つながりと関わりです。今でこそ「総合的な学習の時間」がありますので、各教科がつながっているという感覚は普通だと思われるかもしれませんが、私が中学校で働いていた頃は、教科をつなぐという発想はあまりありませんでした。ですから、学校現場では特に教科のつながり、先生方どうしのつながり、そして地域と学校とのつながりの必要性を主張してまいりました。

2006年、わが国における国連持続可能な開発のための教育の10年、ESDの実施計画。その中にやはり2つの観点が問われています。一つは、個々人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、関わり、つながりを尊重できる個人を育むという観点が含まれております。これは大事なキーワードだと思っております。食という観点からも、防災という観点からも、関わる、つながるというキーワードが関わってくるということです。

2．札幌校総合学習開発専攻における「食」に関する取り組み

私自身のこのような思いを下敷きとした、札幌校での体験のお話しをしたいと思います（【図2-1】）。札幌校、平成18年の大学の再編では基礎学習開発専攻、総合学習開発専攻、教育臨床専攻などという専攻に分かれました。私が所属する総合学習開発専攻はいくつかのグループに分かれるんです。環境教育グループと国際理解教育グループと生活食育グループの3つなんです。この専攻は中学校の先生になる学生を育てるんですが、環境教育は理科、国際理解教育は社会、生活・食育は家庭科の免許状が与えられます。

札幌校　総合学習開発専攻における「食」に関する取り組み

＊総合学習開発専攻1年生　「食・生活教育論」
オプション授業　「稲作体験塾」
美唄市中村地区の圃場で田植え・稲刈りを体験する。

＊生活・食育グループ2年生
教育フィールド研究Ⅳ　「酪農体験塾」
浜頓別町の「ぶんちゃんの里」において、搾乳やバター・アイスクリーム作り等の体験、よつ葉乳業見学、北海道畜産公社見学

【図2-1】札幌校総合学習開発専攻における「食」に関する取り組み

1年生が最初50名ほど入ってきますが、その時はグループに分かれてはいません。グループに分かれていない1年生は、「環境教育理解論」、「国際理解教育理解論」、「食・生活理解論」、それと「総合学習概論」という4つを、全て受けなければならない授業となっています。私は総合学習開専攻の1年生に「食生活教育論」という授業の中で、オプション授業として「稲作体験塾」というのを行っております。これはJA北海道中央会と、美唄市農協、美唄市中村地区の方々のご協力の下に、学生たちが田植えや稲刈りをします。

後半は生活・食育グループに分かれた学生が、稲刈りをした米を炊く調理実習を行います。そして2年生になると、1年後期で分属をしますので、その生活・食育グループに所属してきた学生9～10名位、今は学生が少なくなったので6～7人しかいませんが、2年生を対象に「教育フィールド研究4」という授業で酪農体験塾を実施しています。この酪農体験塾もJA北海道中央会が応援してくださっています。

最初の1年目は、江別市にある酪農学園大学に行って学生たちと交流したり、次の年は清水農業高校で高校生たちと一緒にアイスクリーム作りとかをしたのですが、3年目からは浜頓別町まで行って、「ぶんちゃんの里」というところで酪農体験を始めました。札幌からは浜頓別までバスで6時間くらいかかります。なので、なぜ「ぶんちゃんの里」なのか、同じ酪農体験ならもっと近いところで体験をしたほうが効率的ではないかということも言われ

ましたが、私はあえてこの「ぶんちゃんの里」にこだわっています。今年も、先生、別海はどうですかとかいう言葉も出てきたんですが、「ぶんちゃんの里」に連れて行きました。

どういうことをやっているかと言いますと、「ぶんちゃんの里」には1泊して、次の日にはよつば乳業を見学したり、帰りは北海道畜産公社を見学して帰ってくる。釧路校の「教育フィールド研究8」と同じく2泊3日の旅です。

これは稲作体験。1年生が行っている風景です。手植えと機械植え、手刈りと機械刈りができるようになっています【図2-2】)。

これから酪農体験ですね（【図2-3】)。小川さんご夫妻にお世話になっています。最初は6時間かけて行った。で、行った先は「なんか変なにおいがするところだなあ」と。学生は「ええ、なんでこんなところに連れられてきたの」

【図2-2】稲作体験塾

【図2-3】酪農体験塾①

という顔をしています。今年の学生は6名しかいません。

「ぶんちゃんの里」は青空教室。何もないところで椅子が置かれた簡単な教室になっているので座らせて。自分で作った映像を見せながら、なんでいただきますって言うの、なんでごちそうさまって言うの、といった話をしてくれます。だんだん学生たちは真剣に聞き入っていきます。奥さんが紙芝居を見せてくれます。約40分の青空教室を終えると、学生たちの顔がちょっとひきしまります。

そしてすぐそばにいる子牛にお乳を与えてごらんということでお乳を与えて、牛を連れてきてくれて搾乳体験もすることができます。そんな中で、ぶんちゃんは言います。「この子牛、明日、肥育農家に引き取られるんだよね。なんでか分かる？」学生たちは分かりません。「あれ、雄牛だから」。男子学生が「えっ？」「ここにいる牛はみんな雌なんだよ。雄はいないんだよ。この子牛は一週間前に生まれたけど、雄だからやっちゃうの」。

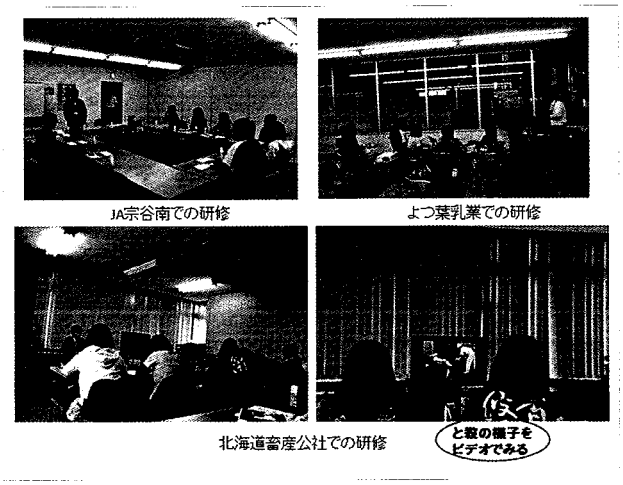
「え？どうして雄は育てないの」と学生は考えます。「ここにいる牛たちは、僕たちにとっては経済的なものなんだ。お金を得るために、自分たちが生活するために、この牛たちにはお乳を出してもらわなきゃいけないんだ。そのために、ここには雌牛がいるんだ」。「じゃあ、どうするの？」「ここにいる牛たちは、ずっとお乳を出し続けるんだ。そのために人工受精をするんだ」と。

人工受精をするのはこういうものだよと用具も見せてくれます。それを見ると学生たちは「え？今、かわいいかわいいと言って見ている子牛…ここにはいられないんだ。ぶんちゃんは経済というけれど、ここにいる牛たちはみんな雌で、とても温かいミルクを出す。それはこのぶんちゃんたちの生活の糧なんだ」ということに気付いていくわけです。

翌日の朝、5：30に牛舎の掃除をするということで、学生たちは眠たい目をこすりながら牛舎の前に立ちます（【図2-4】)。牛舎の中にいる牛を、農地の方に追い出します。そうすると、牛のいなくなった牛舎の清掃がはじまります。はじめはウンチがきたないなんて言いながら嫌な顔をしますが、きれいになっていくうちに、ここに牛が戻って来て、牛たちが気持ちよく生活するために、私たちが一生懸命きれいにするのが大切なんだと、1時間半から2時間の清掃を終えた時にはとても晴れやかな顔になっています。

今年、ぶんちゃんがこの取り組みをやめようとしました。都会の学生さんたちには糞の始末なんて必要ないの

【図 2-4】酪農体験塾②



【図 2-5】酪農体験塾③

ではないかと考えてくださった好意だったんです。でも私は、そのことが学生たちにとってはとても必要なことなので、これをやめられては困りますと言いました。学生たちも、僕たちもそのことを楽しみに来たのでやりますということで今年も清掃を行いました。

それが終りますとご飯を食べて、バター作りやアイスクリーム作りを体験します。これで1泊2日。ここで「ぶんちゃんの里」とはさよならをします。「ぶんちゃんの里」では振り返りをしながら、記念撮影をしていきます。

2日目の午後からはJA宗谷南で、今度は南宗谷での酪農の取り組みについてお話を聞きます（【図 2-5】）。その後よつば乳業で研修を受けます。そして、その日の午後、学生たちには課せられた課題があります。それは浜頓別町の子どもたちに、自分たちが1・2年前期で学んだ食育講座をすることです。その食育講座を行うために、これは大体9月に行われますから、8月の夏休み中にどのような講座をするかを考えて、今年はペープサートでいろんなことをしていました。いろんな物語を作ってやっていました。

その後、子どもたちと一緒に遊ぶという体験をします（【図 2-6】）。彼らは浜頓別町の子どもたちにお土産を持っていきます。今年はこのように金メダルを作っていきました。たった1時間半から2時間くらいの学童保育の子どもたちとの触れ合いですが、毎年やることによって、学生たちも先輩からアドバイスやメッセージを受けて取り組みます。浜頓別町の学童保育の担当者は若い方がいないため、学生たちがここへ行くことで、子どもたちもとっても喜んでくれて走りまわったりします。

ここでまた1泊します。3日目、浜頓別町から札幌に

【図 2-6】酪農体験塾④

向かうという途中で、旭川にある北海道畜産公社に行きます。どうしてここに行くかといいますと、牛の末路を見るためです。牛の末路というのは枝肉になって、私たち消費者の口に入ってくる牛の姿を見るためです。ここに行くと、写真にもありますが、牛の屠殺の映像を見せられます。学生たちは1年生の時に、「命の食べ方」というDVDで豚や牛の屠殺の映像を見ていますので、ここでは2回目ですが、それでも目を覆いたくなるような映像です。その映像を見た後に、実際に皮を剥がれて冷蔵庫に吊るされた牛の枝肉を見て、そして触って、これが私たちが一日前に触れた、あの牛の末路なのだと。こうやって命をいただいているんだと。私たちは命をつないでいるんだということを体感して、帰ってくるわけです。

おわりに

先ほど、半澤先生の方のビデオ等を見ていますと、釧路校の学生さんたちは非常に良い、色々な学びをしていると分かりました。札幌校の学生も同じような学びをしています。でも私が学生たちに望んでいることは何かと言いますと、この体感したこと、五感を通して感じたことを必ずや自分の生き方や生活につなげていくということ。知識だけではなく、生き方暮らし方につなげていってこそ、この体験は生きるんだ。単なる体験ではない。心で感じた、体感なんだ。それを、あなたたちの心に刻み込んで、いつも当たり前と思って暮らしている、当たり前を問うことをしながら、私たちは生きているということを自覚する。そういう学びをつなげていってほしいと願っているわけです。以上で私のお話は終わりにさせていただきたいと思います。

別添資料

いのち・食・生きるに触れる

【酪農家民泊体験実習】

～教育フィールド研究 VIII～

別添資料

いのちの糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために

～教師を目指す学生のための農村ホームステイ～

現在、学校においても様々な
食育の取り組みが行われている。
これをさらに充実発展させるためには
日々子どもと向き合う教師自身こそが
「食」とこれを生み出す第一次産業
そして農山漁村の価値を
「体験」を通じて身をもって実感し、考え
他者に伝える力を
身につけていることが必要である。

このような力量を備えた教師を養成することは
食糧生産基地北海道、とりわけ我が国有数の
農業地帯に囲まれた道東に位置する
北海道教育大学釧路校の使命である。

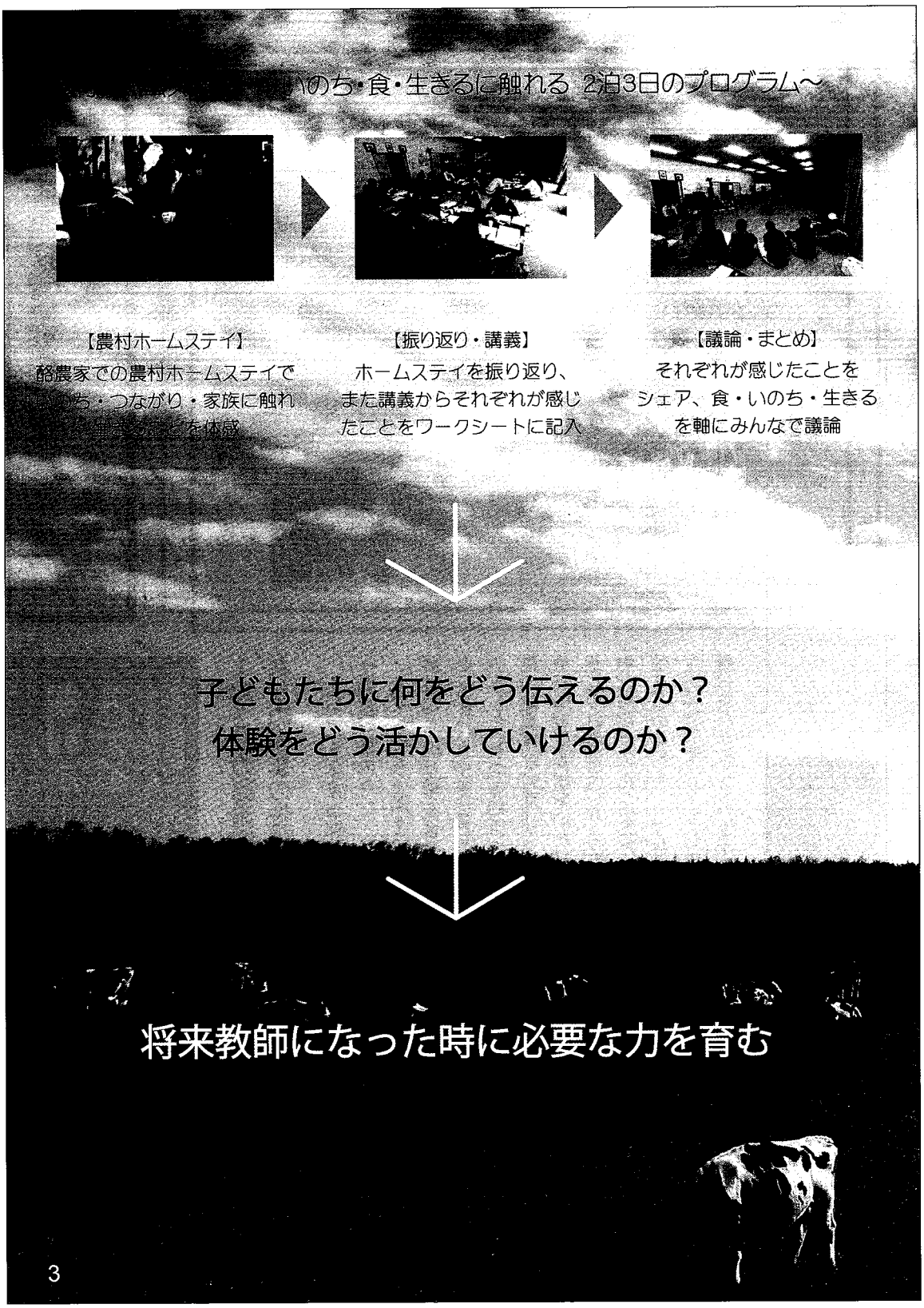
※教育フィールド研究VIIIプロジェクトの概要より抜粋

教育フィールド研究 VIII
いのち・食・生きるに触れる
「農村ホームステイ」

このプログラムは、根室地区農協青年部連絡協議会および株式会社ノースプロダクションの全面協力のもと、北海道教育大学釧路校が将来教師を目指す本校学生を対象として実施する、酪農家宅での農村ホームステイを軸とする2泊3日の「食育」実習プログラムである。ホームステイは、根室地区農協青年部連絡協議会所属の酪農家宅で行っている。1泊2日のホームステイの後、合宿形式での「振り返り」を行って、「食」や「命」、これらを育む第一次産業や農山漁村の価値についての意識や考えを深め、将来自身が教員になった時をイメージしながら、子どもに実体験を通じた自身の気づきを伝えるための手段を検討、議論、共有していく。

2

別添資料


いのち・食・生きるに触れる 2泊3日のプログラム～
【農村ホームステイ】
酪農家での農村ホームステイで
いのち・つながり・家族に触れ
【振り返り・講義】
ホームステイを振り返り、
また講義からそれぞれが感じ
たことをワークシートに記入
【議論・まとめ】
それぞれが感じたことを
シェア、食・いのち・生きる
を軸にみんなで議論
子どもたちに何をどう伝えるのか？
体験をどう活かしていけるのか？
将来教師になった時に必要な力を育む
3

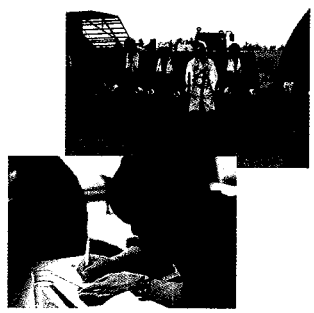
別添資料

平成25年度【酪農家民泊体験実習】実施報告

平成25年度 酪農家民泊体験実習の概要

実施日：平成25年5月31日～6月2日
実施地：根室管内　　参加者：教育フィールド研究Ⅷ受講学生40名

5/31　8:00 大学集合
　　10:00 別海乳業興社視察
　　13:00 酪農家との対面式
　　14:00 農村ホームステイ開始（作業体験・生産者とのふれあい等）
6/1　5:00 起床
　　11:00 農村ホームステイ終了
　　12:00 酪農家との交流・振り返り
　　15:00 講義
　　17:00 夕食づくり
　　19:00 ワークシート記入
6/2　7:00 起床・朝食づくり・掃除
　　9:00 ワークショップ
　　13:00 発表



農村ホームステイ
agricultural homestay

1泊2日の酪農家宅でのありのままの生活体験

1日目、大学を出発したバスは一路、根室管内へ。

まず、牛乳を生産する「別海乳業興社」で工場見学をさせていただき、牛乳ができるまでの過程を学びました。その後19戸の受け入れ先の酪農家と対面、別海町教育長や関係者にご挨拶いただいた後、それぞれの家庭に散らばり、給餌・牛舎掃除や搾乳・ほ乳といった1泊2日の農村ホームステイ（酪農生活体験）がスタートしました。普段何気なく飲んでいる牛乳がどんな場所でどんな人たちによって、そしてどんな想いの中で生み出されているのか？　酪農家宅での様々な作業体験のみならず、受入家庭での温かいふれあいなどからもたくさんの学びと気づきが参加学生にあったようです。いのちの糧「食」が生み出される現場での実体験は、命と向き合い、「生きる」を考える大きなきっかけとなりました。

ホームステイは2日目の午前中まで行われました。

別添資料

振り返り
reflection

生活体験を受入酪農家とともに振り返る

2日目の昼には、全体で集合し、昼食をとりながらそれぞれ感想をシェア。酪農家とともに農村ホームステイを振り返り、感想や気づきを全員で共有しました。また根室地区農協青年部連絡協議会にご協力いただき、受入酪農家以外の多くの若手農業者とお話をする機会もあり、より「生産者」を身近に感じる機会になりました。

講義
lecture

いのち・食・生きるを考える機会

2日目の夕方には根室管内標津町にある研修施設に移動。ここでは「いのち」「食」「生きる」をテーマに本実習のコーディネーターである株式会社ノースプロダクションの近江正隆社長に講演いただきました。その後、「体験を振り返って」「講義を聞いて」の2つのテーマとしたワークシートを配布。各自記入しました。

議論 まとめ
discussion conclusion

これからの『私』—今回の体験をどう引き受け、活かしていくか

3日目午前中はグループワークを行いました。まずは前日に書いたワークシートをシェア。その後、グループごとに意見交換を行い、「受講前後の私の変化」「これからの私〜体験をどう引き受け、活かしていくか?」という2つの課題に沿って最終レポートを作成しました。そして実習の最後として再度集まった酪農家を前に発表を行いました。

受入農家の方から

- 将来教師になった時、今回の経験で学んだ事を、友達や親、先生や生徒に伝えてほしい。
- 普段、疑問に思わないことを質問されたりして、自分の仕事を見つめ直す事ができた。
- 今回のホームステイで感じたことを、自分の意見をもって子どもたちに伝えて欲しい。

参加学生から

- 自分たちが牛を生かし、牛に生かされているという連鎖の関係を良く考えることこそ、食育を考える上で大切になるのだと思う。
- 乳製品は幼い頃から当たり前に口にしているにも関わらず、自分はその背景を知らなかった。当たり前が当たり前でないことにはじめて気が付いた。

別添資料

大学祭連携公開シンポジウム

＜テーマ＞
命の糧「食」の価値を感じ考え伝えるために
教師を目指す学生を対象とした
酪農家民泊体験実習の試み

平成25年10月26日（土）、北海道教育大学釧路校ESD推進センター主催で公開シンポジウムを開催。【酪農家民泊体験実習】の成果報告を行いました。

現在、学校においても様々な食育の取り組みが行なわれています。これをさらに充実発展させるためには、日々子どもと向き合う教師自身こそが、「命の糧・食」とこれを生み出す第一次産業・農山漁村の価値を「体験」を通じて身をもって実感し、考え、他者に伝える力を身に付けていることが必要です。

以上の問題関心から、本学では将来教師を目指す学生を対象とした酪農家宅への「食育民泊体験実習」を軸とした学習プログラムを実施しました。シンポジウムでは、外部講師として近江正隆氏（株式会社ノースプロダクション社長・北海道教育大学釧路校非常勤講師・文部科学省「今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議」委員）、安達永補氏（民泊受入先酪農家・JA標津青年部部長）、小幡泰弘氏（文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課健康教育企画室室長）をお迎えし、その意義と効果について検証しました。本学からも、実習に参加した学生2名（学校カリキュラム開発専攻、白鳥千咲・梶りな）が登壇し、体験を通じて得た自らの学びについて発表しました。

学内外より100名近くの参加を得て、食育を栄養学的な面だけでなく、政治・経済・社会・文化等広い観点からとらえ、実践していくことが重要であること、そのためには栄養教諭だけでなく、一般の教師も「命の糧・食」とこれを生み出す第一次産業・農山漁村の価値を「体験」を通じて実感し、考え、伝える力を身に付けていることが必要であること、そしてこうした力を養い育んでいくためには、教員養成段階における「体験」を軸とした学習プログラムと、それを継続していくための仕組みを作っていくことが必要であること等を確認し、盛会のうちに終了しました。

当日の模様は北海道教育大学釧路校釧路校ESD推進センター『ESD・環境教育研究』第16巻（2014年3月）で読むことができます。

当日のプログラム

- 開会挨拶・登壇者紹介
  北海道教育大学釧路校教授・ESD推進センター長　神田房行
- プログラムの概要説明
  北海道教育大学釧路校准教授　宮前耕史
- 実習プログラムについて紹介
  株式会社ノースプロダクション代表取締役　近江正隆氏
- プログラムに参加しての感想・意見
  北海道教育大学釧路校・3年　白鳥千咲
  同　梶　りな
- 総評
  文部科学省スポーツ・青少年局
  学校健康教育課健康教育企画室室長　小幡泰弘氏
- 意見交換
- 閉会挨拶
  北海道教育大学副学長（釧路校担当）　今泉博

別添資料

酪農家民泊体験実習コーディネーターからのメッセージ

株式会社ノースプロダクション
近江（おうみ） 正隆（まさたか） 代表取締役

＜プロフィール＞
1970年東京生まれ。19歳で単身北海道に移住。酪農・畑作・林業・漁業を経験。現在企画会社ノースプロダクション代表取締役、また十勝管内で農村ホームステイを推進するNPO法人食の絆を育む会の理事長、内閣府地域活性化伝道師、北海道地域づくりアドバイザーなどを務める。また、著書「だから僕は船をおりた」（講談社）がある。

現在、この国の全労働者人口における一次産業従事者の割合は、わずか４％。１００人中４名。つまり２５人に１人が農林漁業に従事しているという計算だ。興味を持ちぼくが生まれた時代（４３年前）を調べてみた。その割合は２０％。つまり５人に１人。そしてぼくの親が生まれた時（７５年前）は、なんと４８％。つまり仕事に就いている人のほぼ２人に１人が農林漁業に従事していたことになる。

きっと昔は、多くの国民が家族や親戚の中に農林漁業者がいたんだと思う。つまり農林漁業・農山漁村が自分事として捉えることが可能な身近な存在だった。でも人口が首都圏・大阪や名古屋などの大都会に集中し、世代が次に変わるごとに自分事に考えられる立場の人たちは少なくなり、いまのような状態になってしまった。きっとこの割合はまだまだ減少しかねない…。

生きていくために欠かせないものがある。どんなに強くなっても、どんなに賢くなっても、どんなに偉くなっても、水や空気、そして食べ物がなければぼくらは生きていけない。そしてそれは、農山漁村で育まれている。農山漁村はそこに住む人たちだけに留まらない社会全体として大切な場所。でも残念ながら、大切な場所だと思うことをイメージできるような身近な存在でなくなってしまっていることが、様々な社会のねじれを生む要因をつくり、社会不安を作っている大きな原因ではないだろうか？だから敢えてしなければならないこと。それは国民みんなが農山漁村を身近に感じ、自分たちの家族が住むようなイメージを持ち、愛着をもって自分事として感じてもらうようになるための仕組づくりだと思う。そのための有効的な手段が「農村ホームステイ」であり、仕組づくりに向けては、農と学びの更なる連携が不可欠だと感じている。

別添資料

教育フィールド研究Ⅷ シラバス

【授業内容】

人間が生きていくために欠かせないのが「食」であり、いのちの糧「食」の大切さを子どもたちに伝えていくことは、教員の大きな役割である。また、生産現場では、どんな人たちがどんな思いを持ち、どんな風に生きているのか？そのことを知っておくことは、将来教員になる者にとっては大変大事であり、必要なことである。

しかしこれまで大自然と対峙した食を生み出す現場での実習はなかなか実現できなかった。本講義は、酪農生活体験を軸とした２泊３日の生産現場での「農村ホームステイ」を行い、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに「食」や「命」についての意識や考えを深め、将来、自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有していく。

【授業の目標】

酪農生活体験を軸とする「農村ホームステイ」を通じて、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、「食」や「命」等に関する意識や考えを深め、教員として子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有する。また、抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ、「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育について検討する。

【到達目標】

酪農生活体験を軸とする「農村ホームステイ」に参加することで、「食」や「命」等に関する意識や考えを深めることができる。

実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、他者とも議論、意見を共有しながら教員として子どもたちに伝えるための手法を検討することができる。

抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育のあり方を検討していくための基礎的視野を養うことができる。

問い合わせ
〒085-8580　北海道釧路市城山１丁目15番55号
北海道教育大学釧路校（担当 准教授 宮前耕史）
TEL/ 研究室直通：0154(44)3238　FAX/ 釧路校：0154(44)3218
Email：miyamae.yasufumi@k.hokkyodai.ac.jp

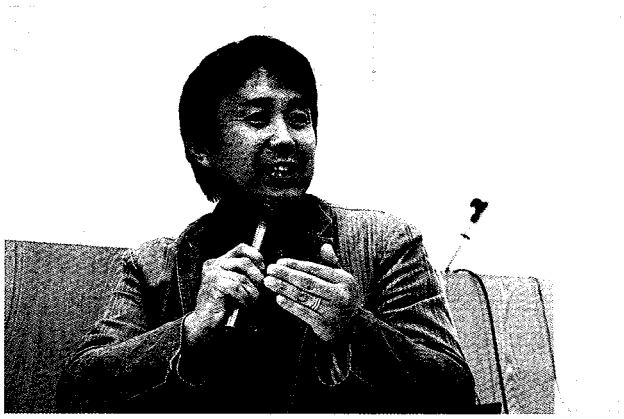
パネルディスカッション

司会　近江　正隆（(株) ノースプロダクション社長、北海道教育大学釧路校非常勤講師、文部科学省「今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議」委員）

パネリスト　半澤　礼之（北海道教育大学釧路校准教授）

伊藤　美実（北海道教育大学釧路校地域教育開発専攻2年生）

アドバイザー　佐々木貴子（北海道教育大学札幌校教授）



近江正隆氏

パネルディスカッションの模様

（近江）

それでは、私もこのような役割は不慣れではありますが、パネルディスカッションの方、進めさせてただきたいと思います。時間も限られてはおりますが、積極的にフロアの皆さんとも意見交換をしていきたいと思います。よろしくお願いします。

半澤先生からの報告があり、伊藤さんにも思いを語っていただいて、佐々木先生からの話がありました。佐々木先生のお話をうかがって、本当に響くキーワードと言いますか、ずっと心の中にとどめておきたいと思うような言葉が、私自身、いくつかありました。お話しの冒頭、ESDというお話の中で、他者の命に与える影響を配慮した生き方、これを家庭科でやられるということは、なかなかそこまで考えられない。すごいなと思います。また、命をつないでいくというための食教育、そして防災教育。なぜそういった取り組みにこだわられているのかという理由も、理解することができました。

ESDのお話が出て、私もESDについてあまり詳しい知識もありませんが、今回もコーディネーターという立場で酪農家民泊体験に関わらせていただいていますが、もう一方で、地域の子ではなく、都会の高校生に対しても同じようなプログラムを提供させていただいています。その中で、今年の10月2日、大阪教育大学の附属池田高校、そこの高校2年生を受け入れました。そのきっかけになったのはもともとその高校の先生で、今は大阪府立大学で教員をしていらっしゃる伊井先生という方が、ESDということで大阪でご活躍されているそうですが、その方とお話をさせていただいた時に、まさしく他者を思う、思いやりというのを一言で考えるとどのようなものと考えますかと言われました。

思いやり、優しさ、人のことを気遣うというようなことを私はお答えしたのですが、伊井先生が言われたのは、伊井先生の言葉ではなくて、ESDという考え方が進んでいる、たしかフィリピンや東南アジアの子どもたちの話だったと思いますが、「思いやりとは人の責任を引き受けることだ」と言われました。ESDということで、今年で3年間関わらせてもらっていますが、持続するためにはそこまで本質的に考える必要があるんだなと。先ほどの佐々木先生の話をきいて少し思い出しましたところでした。

時間も限られているので本題に入っていきたいと思い

ます。「教育フィールド研究8」のご報告をされた中で、学生さんのインタビューや伊藤さんのお話もありました。そして佐々木先生からもお話をいただきました。それらを受けて、企画者の立場から、まずは半澤先生の方からコメント、ご感想があればよろしくお願いいたします。

半澤礼之氏

（半澤）

半澤です、改めてよろしくお願いします。今日いろんなお話を聞いて思ったのは、先ほども佐々木先生のお話しの中にもありました。この体験を一つの授業の中に閉じない、体験して終わりにしてしまわないということだと思います。そうではなく、大きな視点から言えば「生き方」というところにつなげていく。また、大学生ということで言えば、他の授業での学びであるとか、体験。そういったところと、民泊での体験とか学びというところを関連付けて理解し、考えていくということが非常に重要になるのだろうと思います。また、そのためにも、企画サイドとしても、2泊3日体験してそれで授業が終わりということではなく、この先、体験がより豊かに広がり、学びとして残っていくような仕掛け、働きかけをしていかなければならないと思います。

加えて言えば、「教育フィールド研究8」酪農家民泊体験に参加してくれた学生さんたちはいずれ教師になります。私は今教員として発言していますが、学生さんたちが教師になって子どもたちに民泊体験をさせる時が来るとすれば、同じ視点が必要になってくるということです。ぜひそういうことも意識しながら、我々としても学生としても、ともに豊かになるような民泊を、これからもやっていきたいなと思います。

（近江）

ありがとうございます。ご報告の中で、課題ということもあったと思うので、後ほどまたお話しをうかがうことになるかもしれません。

去年と今年に参加された学生さん、本日の参加者の中にも6～7名ほどいらしたと思いますが、今、企画サイドの半澤先生からのお話しを受けて、あるいは今日のご報告を受けて、学生さんの方から何か感想をもらいたいと思うんですけれども。まずは昨年参加された方。その後1年経って、なかなかこのような体験をされたということもなかったように思いますが、今回のご報告を聞いて、いかがでしょうか。昨年のシンポジウムでは、こちらにご登壇していただいた梶さんがいらっしゃいます。いかがでしょうか。

（梶）

昨年「教育フィールド研究8」に参加させていただいて、シンポジウムでは伊藤さんと同じところに座らせていただきました。ですので、もちろん体験もしましたし、体験をどのように伝えるかということについても考えることができました。

佐々木先生のお話しの中で、排泄物の処理ということは都会の子にはやらせない方がよいのではないかというお話しがありました。私もそれはぜひやってもらった方が良いと思いました。というのも、私は昨年、安達さんのお宅で民泊をさせていただきました。そこでは搾乳、これは酪農体験という意味では「楽しい体験」ということになると思いますが、それを簡単にさせるわけにはいかないということで、させてもらえなかったんです。一方で、排泄物の処理にはかなり時間がかかりました。でも、だからこそ、排泄物の処理には時間もかかるし匂いもきついしという、それをさせてもらったからこその学びがありました。また、学童保育の子どもたちへの食育講座、私もすごくやってみたいなと思って聞いていました。

2つ質問があります。伊藤さんに質問なのですが、一つは、私も昨年シンポジウムに登壇させていただいて、伝えるということはとても難しいことだと思いました。半澤先生のご報告の資料の中で、「食・生命の繋がりや重要性を伝えるものとしての教師」という項目で、「伝えられるようになったと思う」という感想が4.49もあってすごいと思ったのですが、もしかしたら私が未熟なのかもしれませんが、私も昨年登壇するに当たって、実感を伴って人に伝えるのはとても難しいと思いました。伊藤さんが、特にこれは伝えることは難しい、苦労したと思われ

たところをお聞ききしたいです。

二つ目は、伊藤さんは道東のご出身ということで、地元でも牛に触る機会があまりなかったということでした。その中で、都会の子どもを対象にという時に、全てを体験してもらうというのはカリキュラム上難しいのだと思います。そうした時に、都会の子どもに対してはどのような教育、食育ができるのか、お考えがあればお聞きしたいと思います。

伊藤美実氏

（伊藤）

ありがとうございます。一つ目の「伝える」ことということについてですが、すべてにおいて伝えるということは難しいなと感じました。やっぱり感情の部分が大きくて。たとえば牛の餌やりをしたという事実だけなら伝えることもできますが、体験にともなった感情を伝えるというのはやはり難しくて。体験した者にしか分からないっていうのはやっぱりあると思いました。

自分が子どもに伝える時に、自分の言葉だけで伝えることは難しいと思いますが、自分が少しでも体験しておくと、匂いはきついけれども、「牛は少し喜んだような顔をした」とか、自分が感じたことを伝えることはできるのではないかと思っています。それでも難しい場合もあると思うので、やはり体験をしてもらうということが大切だと思います。伝えられることにも限界があるので、やはり私は体験を推していきていきたいなと考えています。

二つ目、都会の子にどのような食育があり得るかということですが、実際にこの問題は、期間中のグループワークでも取り上げられました。道東、北海道のような地方では身近で体験ということも実施しやすいのかなと思いますが、都会だと、飛行機を使ってという風になると思うんですよね。あまり深いところまでは話せなかったのですけれども、今は受け入れ農家さんもたくさんいらっしゃるということですので、そういう方が増えていくことによって、都会の子どもにもそういう体験をしてもらうということも可能だと思います。都会の子どもたちにこそこういう体験をしてもらいたいという思いもあるので、やはり人とのつながり。都会と田舎では少し遠いですけれど、人と人とのつながりを作っていければいいなと思っています。あまり答えになっていないかもしれませんが、すみません。

（梶）

ありがとうございます。やはり都会の子どもだからこそ、体験、民泊ということもそうですし、日頃の生活の中で、いかに食について身近に考えてもらうかということが大切なんだなと改めて感じました。ありがとうございました。

（近江）

ありがとうございました。また機会があったら体験してみてください。もうお一方、今回、受け手側としてご尽力いただきました。この企画は送り出す側だけでは成立しません。受け入れてくださる農家さん方がいらっしゃるからこそできるわけで、また、農家さんを束ねる組織があったからこそ、このような仕組みができてきているのではないかと思います。JA 北海道中央会根釧支部の寺口さん。今回、農家さんを束ねていただいた中で、今回のような企画、または一連のお話をお聞きいただいた中でのご感想を一言、よろしくお願いします。

（寺口）

ご紹介いただきましたJA 北海道中央会の寺口と申します。根室地区農協青年部連絡協議会の事務局をしています。若い青年部の人たちで、このような事業に関わっています。みな、このような事業を通じて学生さんに体験してもらって、それをみなさんなりに噛み砕いてもらって、これからそれぞれのステージの中で行動に移してもらいたい等、強い気持ちをもってこの事業に参加しています。

来年に向けて、みなさんがこのように振り返りをされているように、我々も今年の体験を踏まえて、来年もよい事業を作って行こうと思っています。少しでも農業の現場を身近に感じてもらえればいいなと思ってやっていますので、よろしくお願いします。

（近江）

ありがとうございました。私も以前、寺口さんたちの企画で、若手農業者の方たちと意見交換をする機会がありました。先ほども梶さんの質問、伊藤さんのお答えの中にもありました。若手農業者のみなさんも、自分たちのことを分かってほしいということで、食育活動をかなりやっています。根室や北海道に限らず、全国的に、これから長い期間、農業に従事する若手農業者が危機感をもちながら、まさに農業、農山漁村の持続可能性ということを求めて食育活動をされています。

でも、そこで大きく課題として言われていたのは、自分たちは場を提供することはできるけれども、伝えるということになると自分たちは全くの素人だと。伝えるスキルをもっともっと磨いていていかなければということで研修をしようという話もありました。そうした中で、今回のシンポジウムがありました。ここで考えましたのは、得意不得意ということがあり、役割分担があるのではないかと。伝えるということを生産者に求めていくのは違うのではないかと。生産者は場を提供するという所では優位性がありますし、強みがあると思います。あとはつながる先生方の仕事であるという役割分担の中で、体験活動やその振り返りからの学びということを含めて、そこは先生方との関係の中で作っていくことができるのではないかと思います。

一方ではそうした事業と、また「教育フィールド研究8」にも関わらせていただく中で、これはつながりを作っていく中で、農業者・生産者と教員が一緒になって伝えていくということを考えるきっかけにもなるし、もしかしたら将来的にはこうした取り組みこそが、伝えていくための唯一の手段になっていくのかなと学ばせていただきました。とはいえ課題が山積みであるとは思いますが。

時間も限られていますので、課題という部分について、先ほど半澤先生のご報告の中で、課題については後ほどということもありました。さらにに踏み込んでご意見をいただければと思いますが。

（半澤）

課題としては、まず実務的なものがあります。お金のことや時間のことですね。また、それ以外のところで、学びという点で課題を申し上げます。

民泊が終った後、1か月から2か月くらいたったところで何名かの学生さんにインタビューをしています。先ほど動画で見ていただいたものは民泊体験中のインタビューということになりますが、これとは別に、1か月から2か月くらいたったところで、どのような感想をもっているかということでお話しを聞きました。

民泊体験直後は意識も高まっていますので、報告の中でも触れましたように、食べ物を残さない、命を考えるという結果は出ていますが、やはり時間が経過していくと、さきほどもこれからの生活や人生に生かすという話はありましたが、意識の高まりや熱さというのが薄れて、どうしても食べ物を残してしまうという行動が出てきてしまうというようなお話がありました。

ただ、民泊に行く前と行った後とで何が一番違うかと言いますと、これじゃだめだという反省ですね。行動レベルで言うと民泊前と同じ行動をしてしまうということはありますが、意識レベルで言うと、そこで自分自身の反省が加わるようになると。そういうことを学生自身が言っていました。これはどういうことかというと、きっかけがあれば民泊の体験を思い出し、そしてそれを考えることができるようになるということです。ですので、企画側の今後の課題としては、民泊体験を体験だけで終わらせない、振り返りもしていますが、その後のきちんとした形でのフォローアップをするという点があげられると思います。

もちろんこのシンポジウムもフォローアップの一つにはなっていると思いますし、前回、今回の民泊の参加者がここに来てくれているというのも非常にありがたいことだと思います。それを我々教員側がやるということもありますが、体験を話し合うとか、学生さんたちにも自主的に振り返りをしたりする等してもらって、民泊の体験は学生たちにとっては有効に働いているわけですけれども、それをまさしく持続させていくと言いますか、フォローアップをしていくことが今後の課題の一つです。

もう一つは先ほど梶さんと伊藤さんのやりとりの中にもありました、この体験を、フォローアップするのと同時にどのように伝えていくかということですね。学校の先生になった時、子どもたちにどう伝えていくのかということについて、学生たちは伝えることができるようになったという気持ちは高まっていますが、伝える術を私自身も含めてまだ持っていません。伝える術を持っている方とのつながりと言いますか、そうした方からお話を聞いたりしながら、考えていくことが必要かなというのが今後の課題の二つ目になります。そのような実践をやっている方がいらっしゃれば、お話をうかがってみたいと思っています。

（近江）

ありがとうございます。フォローアップ、今後につなげていくということでの課題が見えてきたのかなと思います。そのあたり、佐々木先生におうかがいしたいと思いますが、札幌校では学生たちが体験したことを子どもたちに伝えるという取り組みもあったと思ったのですが、今の半澤先生からの今後の課題というお話をお聞きして、釧路校の「教育フィールド研究8」をまさに持続させていくためのご助言、アドバイスをいただけたらと思うのですが。

佐々木貴子氏

（佐々木）

まず、先ほどの伊藤さんのお話がとても素晴らしかったなと思っています。餌をあげたことは伝えられても、その時の感情は伝えることはできない。でも、餌をあげたら牛が喜んだ顔をしたという言葉で伝えることはできる。それはすごい素敵なことですよね。というのは、それを聞いた子どもたちは、牛はどんな顔をして喜んだのだろうと想像しますよね。自分が喜んだ時の顔はこんな顔だけど、牛が喜ぶ顔ってどんな顔って。イメージや想像を子どもたちが持つというのはとても素晴らしいと思います。ぜひ、そのような言葉を子どもたちに伝えられる教師になっていく、いろんな言葉を見つけて、どうすれば子どもたちが創造性豊かに受け止めて考えてくれるだろうと考えていけば、必ずや子どもたちに伝わっていくだろうと感じました。

半澤先生のお話しの前に、札幌校の学生たちは、小川さんの家に行く前にこんな風に考えているんです。みなさんもそうじゃないですか？酪農家さんの家に行くの？臭いのかなあとか、酪農家って儲からないのではということを、実際にうちの学生は思っていたらしいんです。でも聞いたら、私の給料より高かったと、学生は驚いていました。何でもがすごく大変で、牛の世話をしたり片付けをしたり本当に大変だと思っている。ところが、お二人に会うととても楽しそうに生活していらっしゃるんですよね。学生たちが、牛がいるからここは旅行にも行けないでしょ？と聞くと、いや、年に数回は旅行に行くよ、用事があるときはいつも2人でいくよと。そしたらこの牛はどうするんですかと聞くと、いや、地域の人たちがみんなで協力し合って支え合っているから大丈夫だよと。そしてその年数回の旅行は、自分のお父さんやお母さんと比べたら、よっぽど多く旅行しているわけです。

ちょっと見方が変わったなとなってくるんです。給料も安いでしょというと、2人で1400万以上だよとか、そんなに儲かるのとか話をしますが、でも、ここは大規模な農場ではないから本当に一所懸命、世話しながらやっているんだけどねというと一変するんです。学生たちは元気になるんです。空気がきれいだし、ご飯も美味しいし、都会にはない世界、広々とした環境の中で、学生は何か体験をしたことのない感情を抱くみたいです。そこがとても大事だと思います。先ほどもブラックボックスという話もありましたが、私たちは酪農家さんの生活が見えていない。つまり、第三次産業の中で生活している子どもたちは、農業、酪農とかというと、汚いとかキツいとかいう3Kイメージを持っているけれど、違うんだよと。それが人間の原点なんだよと。

都会で心が病んだ子どもたちが「ぶんちゃんの家」に一週間いると元気になる。それは何かというと、私たちが原点を忘れている。何かモノがあって裕福で。何をもって裕福かはわかりません。でも、今の自分が持っているような、たとえば札幌だったら、あれもあるこれもあるということが裕福という価値基準になってしまっている子どもたちにとって、でも、そうではなくて、このようなところが心の奥に価値基準として必要だということに気づくのかな、と。でもその部分が見えない。でも、近江さんやぶんちゃんたちが拓いてきた「農家においで」と言ってくださる、そのような体験が、はじめてそれを見ることができる第一歩になるんじゃないかなと。生活をお互い見せていくということが大事なのではないかなと思いました。そういったことを強く感じました。

（近江）

ありがとうございます。見えていない、つながってな

いというところを根本的に解決することが必要なんだと改めて思いました。

本当に原点なんですよね。それが生きる上で絶対に必要なのに自分事としてとらえられていないというところが問題の根幹なのかなと。ではどのようにすれば自分事として感じられるんだろうと考えた時に、先ほど伊藤さんも伝えるというところでおっしゃいましたが、自らそう感じなければならない。肌で感じる、五感で感じるというところがまさしくそうで。知識を得るという意味ではプラスもあれば、逆にできないことであるとか、かなわないであるとか、マイナスの部分は、なかなか学力とか学びで評価できません。でも、できない、かなわないからこそ関わらなければならない、つながらなければならないとか、そういう価値観にもつながっていくのではないかと。そういったところの入口は、やはり体験でしかないのかなというふうに改めて感じました。そういった中で、今年は半澤先生にもご協力いただいて、コンセプトマップで可視化するということができたのは大きな実績になったと思います。

実は佐々木先生とは初対面ではありません。先日、実はJA北海道中央会の方と一緒に、あるお願いをしに上がらせていただきました。手短にお話したいと思います。昨年から、JA北海道中央会の方で、現職の先生方とのつながりを作るということで、小・中学校・高校の現職先生方を対象にホームステイをしてもらうということをしています。釧路校「教育フィールド研究8」とまったく一緒だと思います。誰がこのような取り組み、先生と農家、役割を考えながら伝えていきたいということをしているかというと、青年部世代。北海道全体の青年部世代です。昨年、試験的に行って、今年は道南、函館であったり、道東、オホーツク、宗谷等、12の地域で、代表者の方が地域の先生方をホームステイ、民泊体験で受け入れて、一緒に考えていきましょうというプロジェクトがスタートしました。

現職の先生方に対するアプローチですから、道教委等の方でも試行錯誤をしながら、先生方に対してこのプログラムをどのようにどうやっていったら良いのだろう、また先生たちはこのプログラムに対してどういったことを求められるのだろうということを、佐々木先生にもご相談いただき始めたところです。ゆくゆくは先生方と教員養成課程ということで、入口は違うかもしれませんが、佐々木先生の今日の話を聞いて、根源は同じなのかなと。いずれは教育大学という大きな枠組みの中で、このようなことを伝えていくことができる、大きなうねりができれば嬉しいなと勝手に思っている次第です。

時間も過ぎてしまいましたので、最後に一言ずつ、お願いします。先ほど佐々木先生からエールもいただいたと思います。伊藤さん、先ほどのお話しと重なるところもあると思いますが、今後の抱負ということで、一言お願いできればと思います。

（伊藤）

ありがとうございます。私は将来、やはり道東での教育に携わりたいなと考えておりますので、今回の体験を活かして、地域とつながりをもった教育をすることができればと考えております。このような体験をさせていただき、たくさんの方々に関わることができました。本当にありがとうございました。

（佐々木）

私は「子ども地域防災教育」という授業で、年に一度は必ず釧路校に来て授業をしています。私の夫も実は釧路校の卒業生で、教師をしています。千葉県の中学校の校長をしていて、今年が最後になります。みなさんの先輩になりますね。釧路校の学生は、札幌校の学生と比べて、4年間の大学生活で伸びると私は思っています。札幌校の学生たちは、大学に入ってくる時、偏差値という意味では高いのかもしれませんが、出て行く時どうなのかなと思います。釧路校の学生たちと「子ども地域防災教育」という授業で関わっていると、非常に伸び代があって、一生懸命取り組む姿が見られるんですね。先日そんな話を夫と話しました。すると夫は何と言ったかというと、釧路という地域が学生たちを育てているんだと思うよと話していました。

うちの夫は大阪の生まれで、釧路に来て、そして千葉で教員になっていくことになるのですが、釧路校の学生が地域に出て行くと、あなた教育大の学生さんかい、がんばりなよと、地域の方、おじさんおばさんに言われると。今は国立大学法人になりましたが、地域の人たちは、地域にある大学として、教育大の学生たちに期待をしているんだと。そのような期待を受けて、学生たちもそうした期待に応えるためがんばっていかなくてはと思うからではないかな、と話してました。私も同じことを考えていて、先ほど伊藤さんにもどう？と尋ねたところ、伊藤さんも教育大の学生なんだね、頑張りなさいよと、そういうこともあるかもしれないと聞いて、今日も夫との話が増えたと思いました。そうなんだと思います。

酪農体験でみなさんを受け入れてくれる近江さんたち、

地域の方々が思いを託しているわけです。その思いを確実に受け取って、次の世代に伝えていくことがあなたたちの役目です。体験で終わらずに子どもたちに伝えていって、はじめてこの大学で学んだことを生かせるんだと思います。ぜひそのことを忘れずに活躍していってもらえたらと思います。今日はありがとうございました。

（半澤）

佐々木先生の今のお話が締めでも良かったんじゃないかなと思いますが、一点だけ。今までお話があった中で、近江さんがお話しされていたことに共感することがありました。このような体験をしたら、感動しました、勉強になりましたということを学生さんはお話ししてくれますが、勉強して知識が増えていくということは、分からないこととか知らないことも増えていくことにつながるわけです。勉強すればするほど、知識が増えれば増えるほど自分は何を知らないのか、何ができないのかということに気付くことができる。これは非常に大切で、このような体験をした時に、非常に勉強になりましたというだけでなく、もっと葛藤や苦悩をしてほしいと思います。

体験をすることで牛のことが分からなくなったとか、町のことが分からなくなったとか。余計分からなくなったというのは学びの重要な一側面だと思います。繰り返しになりますが、知識が増えれば自分の無知に気付くことができます。そこから新しく学ぼうとする力が生まれると思います。このような体験授業は、座学の授業ももちろん大切ですが、そういった気付きをたくさん与えてくれる実習だと思うので、ぜひこの実習に参加したり、他の体験学習にも積極的に参加するということを、先ほどのような話を念頭において、していただければと思います。

私も釧路校に来て2年ですが、みなさんにはたくさんの伸び代があると思っています。この大学で非常に楽しく学ばせていただいているので、これからもいっしょにがんばっていけたらと思います。

（近江）

ありがとうございました。短い時間でしたが、僕自身一番学ばせていただきました。先ほどの佐々木先生のお言葉にありました。本当に名言中の名言だったと思います。知識だけではなく生き方につなげていく。今年、去年と参加していただいた学生さんは、ぜひ生き方につなげてもらいたいと思いますし、また、それを言葉でつなげていってほしいと思います。

来年もこの取り組みは続くと思います。ですので、体験した学生さん、授業に参加された学生さんたちが、さらに生き方としてつなげていけるよう、私たちも学んでいけたらと思います。時間が過ぎたので、パネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

閉会のご挨拶

玉　井　康　之
（北海道教育大学釧路校教授・副学長（釧路校担当））

副学長の玉井です。本来ならここでお礼のご挨拶となりますが、私も一言感想を述べさせていただいて、お礼に替えさせていただきたいと思います。

まず、近江先生、佐々木先生、半澤先生、伊藤さん、そして受け入れてくださった農家の皆様、コーディネートしていただいたJA北海道中央会根釧支部の皆様に御礼申し上げたいと思います。私も本当にいろいろなことを勉強させていただきました。ありがとうございました。

「食」ということ自体、子どもたちにとって身近なものですが、教科内容としては総合的な特色を持っています。教科横断的な内容、総合的な内容を持っています。「食」を通じた体験学習は、教科の内容としてあらゆるところに持っていくことができる。共通課題として扱える本当に有用な素材です。きっとみなさんが現場に行かれた時も、あらゆる教科と結びつけながら教育ができる大事な素材と思います。

それから2点目、地域。学校の先生は、子どもの相手をしているだけではなく、保護者や地域の方々も含め、さまざまな人とのネットワークをつなぐ。そう言った意味でのつながりを実感することができるようなこうした機会は、本当に勉強になると思います。色々な人々を結びつけつつ、子どもたちにも教育の素材を提供していくことができれば、自分だけでは伝えられない様々な現実や、様々な深い知識を教育に持ち込むことができます。そういうネットワークを作ることができるこのような機会は、本当に大事なことと思います。

本校の卒業生の初任地の半数は僻地です。そうすると、道東の地域では、酪農地帯に行くということになるのがほとんどです。子どもの生活も分からないで、結局農業のことや食べ物のこと、あるいは生物を教えたりすることになります。子どもは実際現場を見ているわけですが、これらについて中途半端な理解のままですすめていくというのは、教師として浅はかです。子どもたちの生の生活、それは子どもたちの生業でもあって、そのおかげで私たちは食べることもできている。子どもたちの生活を知るといった意味でも、今回は大事な体験であったと思います。

先ほど近江先生もお話ししていましたが、農業・農家の方は、現実を伝えることができます。ただ、それを伝えるということは必ずしも農家の役割ではない。これは教育の役割なのだということをお話ししていました。本学の中でも釧路校は93％の学生が教員採用試験を受ける、日本で一番教師を目指す率が高い大学です。この大学がその伝えるということを使命にしなかったら、役割がなくなってしまいます。

子どもたちに伝えていくという中で、子どもたちが自分たちの生業や命の糧・食の大切さを理解することができれば、彼らは必ずや元気になって、地域の担い手の一人となってくれるだろうと思います。その媒介をするのがわれわれ、教育という役割を担った人間です。みなさんが体験したことをぜひ教材にして、今度は伝える側になっていただきたい。自分の知識を今度は実践に還元してもらえたらと思います。

本学は実践・体験を重視するということを是としています。色々な機会がありますが、そうした実践・体験を、今度は現場で子どもたちに伝えていくという取り組みにつなげていってもらえたらと思います。これらをトータルに考えるとESDという発想になると思います。本校は、教員養成大学としてESDを推進し、センターを持っている唯一の大学です。取り組みの成果を子どもたちにもつなげていければと考えています。本日はご参会いただいた方々、本当に熱心に聞いていただきました。体験の場を用意してくださったみなさま、地域のみなさま、本日のパネリストのみなさま、そして準備をしてくださった宮前先生をはじめご準備いただいたみなさまに本当にお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。